

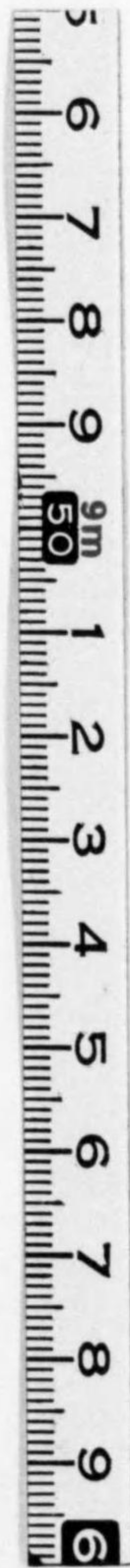
64-254



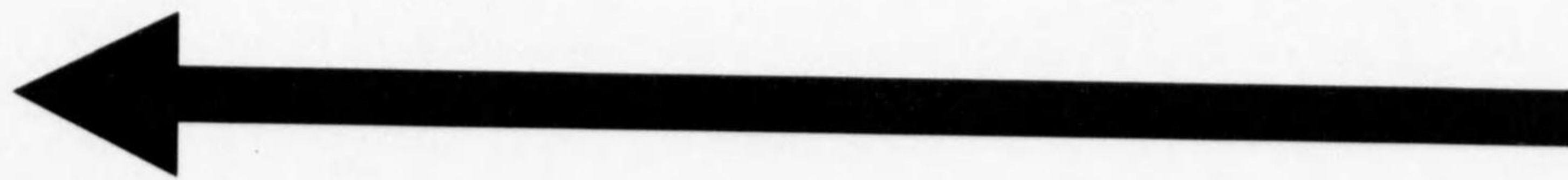
1200501278118

64

64



始





IR-71



木戶孝允文書 第四





64-254

木戸孝允文書 第四

自明治三年  
至明治五年

目次

卷 十	明治三年自正月 至十二月
一	宍戸璣宛書翰 明治三年正月三日
二	宍戸璣宛書翰 明治三年正月五日
三	木梨信一宛書翰 明治三年正月六日
四	廣澤兵助宛書翰 明治三年正月六日
五	宍戸璣宛書翰 明治三年正月八日
六	森清藏宛書翰 明治三年正月八日
七	野村素介宛書翰 明治三年正月八日
八	野村素介宛書翰 明治三年正月十二日

目次

一一〇七八六三二一





目次

九	大久保利通・黒田清隆宛書翰	明治三年正月廿九日	一二
一〇	南野一郎宛書翰	明治三年二月一日	一三
一一	山縣彌八宛書翰	明治三年二月二日	一四
一二	内海忠勝宛書翰	明治三年二月六日	一七
一三	内海忠勝宛書翰	明治三年二月六日	一八
一四	小幡高政宛書翰	明治三年二月十一日	一八
一五	伊藤博文宛書翰	明治三年二月十五日	二〇
一六	内海忠勝宛書翰	明治三年二月廿一日	二二
一七	西島青浦・小野勝三郎宛書翰	明治三年二月廿二日	二三
一八	品川彌二郎宛書翰	明治三年二月廿五日	二四
一九	宍戸璣宛書翰	明治三年二月廿七日	二五
二〇	大津四郎右衛門宛書翰	明治三年三月一日	二六
二一	宍戸璣宛書翰	明治三年三月二日	二七

二二	横村正直宛書翰	明治三年三月三日	二九
二三	貞永幽之助宛書翰	明治三年三月三日	三一
二四	内海忠勝宛書翰	明治三年三月三日	三二
二五	南貞助宛書翰	明治三年三月四日	三三
二六	小幡高政宛書翰	明治三年三月五日	三五
二七	名和緩宛書翰	明治三年三月九日	三七
二八	横村正直宛書翰	明治三年三月九日	三八
二九	杉孫七郎宛書翰	明治三年三月十三日	三九
三〇	宍戸璣宛書翰	明治三年三月十四日	四〇
三一	吉富簡一宛書翰	明治三年三月十五日	四三
三二	長屋又輔宛書翰	明治三年三月十八日	四四
三三	木梨信一宛書翰	明治三年三月廿三日	四五
三四	宍戸璣宛書翰	明治三年三月廿六日	四六

目次



目次

三五	兼重讓藏宛書翰	明治三年四月三日
三六	小幡高政宛書翰	明治三年四月四日
三七	西島青浦宛書翰	明治三年四月十二日
三八	大久保利通宛書翰	明治三年四月廿日
三九	伊藤博文宛書翰	明治三年四月廿一日
四〇	作間正臣宛書翰	明治三年四月廿一日
四一	吉富簡一宛書翰	明治三年四月廿七日
四二	大久保利通宛書翰	明治三年五月六日
四三	伊藤博文宛書翰	明治三年五月十三日
四四	木梨信一宛書翰	明治三年五月十三日
四五	伊勢華宛書翰	明治三年五月廿六日
四六	榎村正直宛書翰	明治三年五月廿六日
四七	平岡通義宛書翰	明治三年六月五日

四七  
四八  
四八  
五〇  
五一  
五三  
五四  
五五  
五六  
五八  
五九  
六〇  
六二

四八	森寺常德宛書翰	明治三年六月十日
四九	伊藤博文宛書翰	明治三年六月十三日
五〇	伊藤博文宛書翰	明治三年六月十五日
五一	門脇重綾宛書翰	明治三年六月十五日
五二	廣澤兵助宛書翰	明治三年六月十七日
五三	伊藤博文宛書翰	明治三年六月十七日
五四	伊藤博文宛書翰	明治三年六月十七日
五五	福羽美靜宛書翰	明治三年六月十七日
五六	林友幸宛書翰	明治三年六月十七日
五七	佐々木高行宛書翰	明治三年六月十八日
五八	伊藤博文宛書翰	明治三年六月廿二日
五九	福羽美靜宛書翰	明治三年六月廿五日
六〇	大久保利通宛書翰	明治三年六月廿七日

目次

六二  
六三  
六四  
六五  
六六  
六七  
六八  
六九  
七〇  
七二  
七二  
七三  
七三  
七四



目次

六一	野村素介宛書翰	明治三年六月廿九日	七六
六二	伊藤博文宛書翰	明治三年七月二日	七七
六三	大久保利通宛書翰	明治三年七月四日	八一
六四	大隈重信宛書翰	明治三年七月八日	八三
六五	大木喬任宛書翰	明治三年七月八日	八五
六六	渡邊伊兵衛兼重讓藏宛書翰	明治三年七月十二日	八六
六七	伊藤博文宛短信	明治三年七月十六日	八七
六八	黒田清隆宛書翰	明治三年七月十七日	八七
六九	廣澤兵助宛書翰	明治三年七月十八日	八八
七〇	大木喬任宛書翰	明治三年七月廿三日	八九
七一	廣澤兵助宛書翰	明治三年七月廿五日	九〇
七二	伊藤博文宛書翰	明治三年七月廿八日	九一
七三	大橋愼三宛書翰	明治三年七月三十日	九三

七四	久保斷三宛書翰	明治三年八月七日	九五
七五	三條實美宛書翰	明治三年八月十一日	九七
七六	品川彌二郎宛書翰	明治三年八月十五日	九八
七七	岩倉具視宛書翰	明治三年八月十六日	九八
七八	伊藤博文宛書翰	明治三年八月十七日	一〇〇
七九	三條實美宛書翰	明治三年八月廿日	一〇二
八〇	吉富簡一宛書翰	明治三年八月廿日	一〇六
八一	三條實美宛書翰	明治三年八月廿四日	一〇六
八二	伊藤博文宛書翰	明治三年九月四日	一〇八
八三	林友幸宛書翰	明治三年九月四日	一〇九
八四	西島青浦宛書翰	明治三年九月四日	一一三
八五	普國公使「ケンフルマン」宛書翰	明治三年九月十一日	一一五
八六	伊藤博文宛書翰	明治三年九月十三日	一一六

目次



八七 大久保利通宛書翰 明治三年九月十三日  
 八八 吉富簡一宛書翰 明治三年九月十七日  
 八九 吉富簡一宛書翰 明治三年九月十八日  
 九〇 吉富簡一宛書翰 明治三年九月十八日  
 九一 岩倉具視宛書翰 明治三年九月廿日  
 九二 野村素介宛書翰 明治三年九月廿三日  
 九三 廣澤兵助宛書翰 明治三年九月廿五日  
 九四 吉富簡一宛書翰 明治三年九月廿九日  
 九五 下村珪太郎宛書翰 明治三年十月七日  
 九六 門脇重綾宛書翰 明治三年十月十日  
 九七 西島青浦宛書翰 明治三年十月十四日  
 九八 杉孫七郎宛書翰 明治三年十月廿三日  
 九九 井上馨宛書翰 明治三年十月廿五日

一一六  
一一七  
一一七  
一一八  
一一八  
一二二  
一二三  
一二四  
一二四  
一二五  
一二六  
一二六  
一二七

一〇〇 柏村數馬宛書翰 明治三年十月廿六日  
 一〇一 杉孫七郎宛書翰 明治三年十月廿七日  
 一〇二 中島佐衡宛書翰 明治三年十月廿七日  
 一〇三 中島佐衡宛書翰 明治三年十月廿八日  
 一〇四 井上馨宛書翰 明治三年十月廿九日  
 一〇五 伊藤博文宛書翰 明治三年閏十月四日  
 一〇六 大久保利通宛書翰 明治三年閏十月五日  
 一〇七 西島青浦宛書翰 明治三年閏十月九日  
 一〇八 伊藤博文宛書翰 明治三年閏十月十二日  
 一〇九 伊藤博文宛書翰 明治三年閏十月十三日  
 一一〇 北川清助宛書翰 明治三年閏十月廿四日  
 一一一 鈴木直衛宛書翰 明治三年閏十月廿四日  
 一二二 杉孫七郎宛書翰 明治三年閏十月廿四日

一三〇  
一三二  
一三六  
一三七  
一三八  
一三八  
一三九  
一四〇  
一四一  
一四一  
一四二  
一四四  
一四四  
一四五



一一三	大久保利通宛書翰	明治三年十一月五日	一四八
一一四	大久保利通宛書翰	明治三年十一月十六日	一四九
一一五	横村正直宛書翰	明治三年十一月十七日	一五二
一一六	船越衛宛書翰	明治三年十一月十七日	一五三
一一七	平岡通義宛書翰	明治三年十一月十九日	一五五
一一八	大久保利通宛書翰	明治三年十一月三十日	一五六
一一九	大久保利通宛書翰	明治三年十二月七日	一五六
一二〇	宍戸璣宛書翰	明治三年十二月七日	一五八
一二一	品川彌二郎宛書翰	明治三年十二月八日	一六一
一二二	横村正直宛書翰	明治三年十二月八日	一六四
一二三	宍戸璣宛書翰	明治三年十二月上旬	一六五
一二四	大久保利通宛書翰	明治三年十二月十三日	一六六
一二五	三條實美宛書翰	明治三年十二月十四日	一六七

一二六	井上馨宛書翰	明治三年十二月十五日	一六九
一二七	鳥尾小彌太宛書翰	明治三年十二月廿七日	一七〇

卷十一 明治四年自正月

一	大久保利通宛書翰	明治四年正月九日	一七三
二	鳥尾小彌太宛書翰	明治四年正月十四日	一七四
三	吉田右一宛書翰	明治四年正月十五日	一七五
四	三條實美宛書翰	明治四年正月廿三日	一七六
五	松田道之宛書翰	明治四年正月廿五日	一七八
六	横村正直宛書翰	明治四年正月廿六日	一七九
七	柏村數馬宛書翰	明治四年正月廿七日	一八〇
八	内海忠勝宛書翰	明治四年二月二日	一八三
九	森寺常德宛書翰	明治四年二月五日	一八四



一〇	門脇重綾宛書翰	明治四年二月八日	一八五
一一	岩倉具視宛書翰	明治四年二月十日	一八六
一二	河瀬眞孝宛書翰	明治四年二月十五日	一八八
一三	伊藤博文宛書翰	明治四年二月十八日	一九二
一四	吉富簡一宛書翰	明治四年二月十八日	一九五
一五	三條實美岩倉具視宛書翰	明治四年二月廿六日	一九五
一六	三條實美宛書翰	明治四年二月廿八日	一九八
一七	横村正直宛書翰	明治四年二月廿八日	一九九
一八	北川清助宛書翰	明治四年三月四日	二〇一
一九	鈴木直衛宛書翰	明治四年三月十二日	二〇二
二〇	吉富簡一宛書翰	明治四年三月十六日	二〇三
二一	横村正直宛書翰	明治四年三月十七日	二〇五
二二	南野一郎宛書翰	明治四年三月十七日	二〇七

二三	宍戸璣宛書翰	明治四年三月廿日	二〇八
二四	南野一郎宛書翰	明治四年三月廿一日	二一〇
二五	河北一宛書翰	明治四年三月廿四日	二一一
二六	河北一宛書翰	明治四年三月廿五日	二一一
二七	山田顯義三好重臣宛書翰	明治四年三月廿六日	二一二
二八	井上馨山縣有朋三浦梧樓宛書翰	明治四年三月廿六日	二一三
二九	西島青浦藤井八十衛三輪惣兵衛宛書翰	明治四年四月三日	二一六
三〇	大久保利通宛書翰	明治四年四月五日	二一八
三一	御堀耕助宛書翰	明治四年四月十一日	二一九
三二	石田英吉宛書翰	明治四年四月十八日	二二〇
三三	南野一郎宛書翰	明治四年四月十九日	二二一
三四	杉孫七郎宛書翰	明治四年四月廿五日	二二二
三五	杉孫七郎宛書翰	明治四年四月廿六日	二二五







六二 内海忠勝宛書翰 明治四年七月十九日  
 六三 吉富簡一宛書翰 明治四年七月廿日  
 六四 吉富簡一宛書翰 明治四年七月三十日  
 六五 伊藤博文宛書翰 明治四年八月三日  
 六六 伊藤博文宛書翰 明治四年八月四日  
 六七 平原平右衛門等宛書翰 明治四年八月四日  
 六八 北川清助宛書翰 明治四年八月四日  
 六九 井上馨宛書翰 明治四年八月十三日  
 七〇 品川彌二郎宛書翰 明治四年八月十三日  
 七一 北川清助宛書翰 明治四年八月十五日  
 七二 伊藤博文宛書翰 明治四年八月十五日  
 七三 陸奥宗光宛書翰 明治四年八月廿日  
 七四 井上馨宛書翰 明治四年八月廿一日

二五五  
二五六  
二五八  
二五九  
二六〇  
二六〇  
二六三  
二六四  
二六六  
二六九  
二七〇  
二七二  
二七三

七五 吉富簡一宛書翰 明治四年八月廿四日  
 七六 伊藤博文宛書翰 明治四年八月廿八日  
 七七 萬代利兵衛同甚七宛書翰 明治四年八月廿八日  
 七八 河北俊弼宛書翰 明治四年九月一日  
 七九 伊藤博文宛書翰 明治四年九月六日  
 八〇 陸奥宗光宛書翰 明治四年九月七日  
 八一 伊藤博文宛書翰 明治四年九月九日  
 八二 松田道之宛書翰 明治四年九月九日  
 八三 伊勢華宛書翰 明治四年九月十二日  
 八四 南貞助宛書翰 明治四年九月十二日  
 八五 井上馨宛書翰 明治四年九月十四日  
 八六 吉富簡一宛書翰 明治四年九月十四日  
 八七 吉富簡一宛書翰 明治四年九月十五日

二七四  
二七五  
二七六  
二七七  
二八〇  
二八一  
二八二  
二八二  
二八三  
二八五  
二八六  
二八七  
二八七  
二八七



八八	井上馨宛書翰	明治四年九月十七日	二八八
八九	伊藤博文宛書翰	明治四年九月十九日	二八九
九〇	吉富簡一宛書翰	明治四年九月十九日	二九一
九一	河瀬眞孝宛書翰	明治四年九月十九日	二九二
九二	河瀬眞孝宛書翰	明治四年九月廿七日	二九三
九三	三浦芳介宛書翰	明治四年九月三十日	二九四
九四	吉富簡一宛書翰	明治四年九月下旬	二九五
九五	宍戸璣宛書翰	明治四年十月十一日	二九六
九六	西島青浦宛書翰	明治四年十月十二日	二九七
九七	大谷光尊宛書翰	明治四年十月十三日	二九七
九八	吉富簡一宛書翰	明治四年十月十四日	二九八
九九	井上馨宛書翰	明治四年十月十五日	二九九
一〇〇	河瀬眞孝宛書翰	明治四年十月十六日	三〇〇

一〇一	井上馨宛書翰	明治四年十月十八日	三〇一
一〇二	井上馨宛書翰	明治四年十月十九日	三〇二
一〇三	榎村正直宛書翰	明治四年十月廿日	三〇三
一〇四	吉富簡一宛書翰	明治四年十月廿二日	三〇四
一〇五	高杉小忠太宛書翰	明治四年十月廿三日	三〇七
一〇六	大津四郎右衛門宛書翰	明治四年十月廿五日	三〇八
一〇七	渡邊昇宛書翰	明治四年十月廿五日	三〇九
一〇八	伊藤博文宛書翰	明治四年十月下旬	三一〇
一〇九	伊藤博文宛書翰	明治四年十一月五日	三一〇
一一〇	榎村正直宛書翰	明治四年十一月五日	三一〇
一一一	榎村正直宛書翰	明治四年十一月七日	三一三
一一二	門脇重綾宛書翰	明治四年十一月八日	三一五
一一三	三條實美宛書翰	明治四年十一月十日	三一六



一一四	青木周藏宛書翰	明治四年十一月十日	三一七
一一五	杉山孝敏宛書翰	明治四年十二月十七日	三一九
一一六	西島青浦宛書翰	明治四年十二月十八日	三二二
一一七	杉孫七郎・柏村信久保斷三宛書翰	明治四年十二月廿日	三二三
一一八	吉富簡一宛書翰	明治四年十二月廿日	三二七
卷十一 明治五年 <small>自正月</small> 至十二月			
一	三浦梧樓宛書翰	明治五年正月十一日	三二九
二	榎村正直宛書翰	明治五年正月十三日	三三一
三	河北俊弼宛書翰	明治五年二月朔日	三三六
四	河瀬眞孝宛書翰	明治五年二月十一日	三三八
五	杉山孝敏宛書翰	明治五年二月十一日	三四〇
六	榎村正直宛書翰	明治五年二月廿日	三四二

七	井上馨宛書翰	明治五年三月十一日	三四二
八	河北俊弼宛書翰	明治五年三月廿一日	三四七
九	西島青浦宛書翰	明治三年三月廿八日	三五〇
一〇	尖戸璣宛書翰	明治五年三月廿九日	三五二
一一	西岡逾明宛書翰	明治五年四月二日	三五五
一二	廣澤健三宛書翰	明治五年四月十日	三五八
一三	吉富簡一宛書翰	明治五年四月廿四日	三五九
一四	西島青浦宛書翰	明治五年四月廿九日	三六一
一五	西島青浦宛書翰	明治五年五月廿九日	三六一
一六	西島青浦宛書翰	明治五年七月朔日	三六三
一七	柏村信宛書翰	明治五年七月朔日	三六五
一八	杉山孝敏宛書翰	明治五年七月朔日	三六八
一九	山田顯義宛書翰	明治五年七月二日	三七一



二〇 杉孫七郎宛書翰 明治五年七月二日 三七三

二一 杉山孝敏宛書翰 明治五年七月十七日 三七六

二二 穴戸璣宛書翰 明治五年八月廿日 三七八

二三 西島青浦宛書翰 明治五年八月廿二日 三七九

二四 森寺常德宛書翰 明治五年八月廿九日 三八一

二五 内閣員へ贈りし書翰 明治五年八月 三八二

二六 木梨信一宛書翰 明治五年八月 三八八

二七 河瀬眞孝宛書翰 明治五年八月 三九一

二八 森寺常德宛書翰 明治五年九月五日 三九三

二九 品川彌二郎宛書翰 明治五年九月七日 三九五

三〇 井上馨宛書翰 明治五年九月十四日 三九七

三一 長三洲宛書翰 明治五年九月十八日 四〇四

三二 長興專齋宛書翰 明治五年九月廿四日 四〇八

三三 尾崎三良宛書翰 明治五年九月廿七日 四〇九

三四 佐々木和三郎宛書翰 明治五年九月三十日 四一〇

三五 寺島宗則宛書翰 明治五年十月六日 四一一

三六 平原太作宛書翰 明治五年十月十日 四一二

三七 西島青浦宛書翰 明治五年十月廿三日 四一三

三八 杉山孝敏宛書翰 明治五年十一月三日 四一四

三九 河瀬眞孝宛書翰 明治五年十一月三日 四一六

四〇 富田鐵之助宛書翰 明治五年十一月七日 四二〇

四一 西島青浦宛書翰 明治五年十一月十九日 四二一

四二 山田顯義宛書翰 明治五年十一月廿日 四二二

四三 渡邊洪基宛書翰 明治五年十一月廿七日 四二三

四四 赤松連城宛書翰 明治五年十一月廿八日 四二六

四五 南貞助宛書翰 明治五年十一月廿九日 四二七



目次

二十四

四六 杉山孝敏宛書翰 明治五年十一月

四二七

四七 木梨信一宛書翰 明治五年十一月

四二八

○

追加 大村益次郎宛書翰 明治二年二月八日

四三一

○本目次は讀者の便に供せんか爲め本會に於て作製せるものなり○

四二  
四三  
四四  
四五  
四六  
四七  
四八  
四九  
五〇  
五一  
五二  
五三  
五四  
五五  
五六  
五七  
五八  
五九  
六〇  
六一  
六二  
六三  
六四  
六五  
六六  
六七  
六八  
六九  
七〇  
七一  
七二  
七三  
七四  
七五  
七六  
七七  
七八  
七九  
八〇  
八一  
八二  
八三  
八四  
八五  
八六  
八七  
八八  
八九  
九〇  
九一  
九二  
九三  
九四  
九五  
九六  
九七  
九八  
九九  
一〇〇

木戸孝允文書 卷十 明治三年



木戸孝允文書卷十

木戸孝允文書 卷十 明治三年

尖戸磯宛書翰 明治三年正月三日

亂筆御推覽奉願候



杉氏は杉  
孫七郎  
彌二郎は  
品川彌二  
郎

別紙杉氏より到來如何可仕哉何分之儀御示論奉願候彌二郎此折柄出萩と申事は甚六つケ敷事と被相考申候萩城之方切迫之余自然も動搖有之候は御安事と奉存候つまり彌二郎より先一書にても情實巨細申越置候方可然歟とも奉存候如弟老物にても實に腹が立申候萩城之情實も思ひ遣られ申候

清末公は  
毛利元純

○清末公余程御奮發の由御末家方いつれも御同様之御事に御座候得共主となりて御盡力被遊候御方無御座は徹底不仕候に付此節之行が、り能く御腹入仕候様申上るも疎至極に御座候得共清末公始へも仰込置詰度

木戸孝允文書卷十 (明治三年正月)



(兩君上は  
毛利敬親同  
元徳)

條理判然たる所を以被仰聞此上及暴動候得は則天下之罪人に付  
兩君上を奉始御末家方におゐても無是非御次第之處得と被仰聞度乍去上  
々様方御一統之御決心乍恐御大事と奉存候兵力を以政府に相迫り候次第  
は奉對 天朝臣子之分元より不相濟邊は清末公始十分に御□り被爲在度  
奉存候先は爲其草々頓首拜

正月三日

尙々別紙返答之儀如何仕候可然哉必々御示諭奉願候○昨夜已來之光  
景如何に御座候哉御承知之邊相窺度奉存候拜  
別紙は御一覽之上御返與奉願候

敬字 先生御密拆

鐵面生

(敬字は尖  
戸磯)

二 尖戸磯宛書翰

明治三年正月五日

先以御清適奉大賀候さては昨日粗申上置候東京御飛脚片時も速なる方可

(河野は河  
野龜太郎佐  
藤は佐藤與  
三左衛門)

然歟と奉存候十五日中に兵庫へ着仕候は、十六日之飛脚船に於十八九日  
迄には東着可相成と愚考仕候且又河野佐藤始船將之面々并に干城隊世話  
役連に得と 御主意之處被仰聞置冥々中に屹度御用意は被爲在度元より  
毫も氣鋒被相顯候様之儀御坐候は不相濟候得とも極密之御廟議相立候  
上は其御覺悟御内密に無御坐は當其時必御不都合而已ならず實に不可  
挽御大事と奉存候何卒被仰合御極密に御手筈奉祈候先は爲其草々頓首拜

正月五日

(廣澤は廣  
澤兵助)

尙々東京へは廣澤まで諸彦方より凡前途之御見込之邊も被仰越置候方  
必可然と奉存候い細は弟よりも申越置候必奉願候尙諸彦へも可然奉願  
候拜

敬字 老兄御密拆

干令

(敬字は尖  
戸磯)

三 木梨信一宛書翰

明治三年正月六日

木戸孝元文書卷十 (明治三年正月)



(數馬は柏村數馬)

拜啓愚按左に申上候御高按之上被仰合御取捨可被成下候

一 大監察之處些御人少敷と奉存候此數馬先生を大監察に被仰付候は如何に御坐候哉御末家方之處丸々同氏引受到被仰付御末家上下とも今日之次第得と腹入いたし

兩君上之御主意を御體任被爲成候様奉願候

一 干城隊之處も何卒今日より得と 御主意被仰聞一統其覺悟仕候様御手を被爲着度奉存候事

一 船將ども早々被召呼厚く 御主意同様被仰聞各艦とも不覺無之様御配慮被爲在度奉存事

一 大隊之方も長官は不申及精々一隊之方向相定候様是又 御主意厚く被仰聞度奉存事

三條何分にも今日より冥々に御盡力不被成置は前途之處甚御六つヶ敷と奉存事

(野素は野村素介)

(國貞は國貞廉平)

一 野素先生も彼先生と同體に而勉強いたし専ら隊之方に盡力有之候様有之度奉存事

一 國貞先生などへも日々之情實可相成は御通致必可然と奉存候

一 賞典も至當之事は速に被爲行候方可然と奉存事

一 諸郡在役并に大庄屋已下大に民望を失し候ものは御詮儀之上早々被爲免候は如何

民政には却る小幡などを御登用之方世上之釣り合可然敷と奉存候

一 荒歲に付候は麥作出來までは各厚く心抱いたし候様被仰付萬一飢餓に及ひ候時可相成丈け之御世話被成下候段諸郡へ御示し有之は如何

右大略申上置候草々頓首拜

正月六日

尙々御末家之處吳々も御大事に付是までの御行が、り尙前途御見据へ之邊も得と貫徹仕候様必竟御盡力奉祈候拜



適庵老兄極密

六 鐵面

四 廣澤兵助宛書翰

明治三年正月六日

第五

逐々申上候次第に付自然其極に至り候得は屹度斷乎たる御所致も不被爲在るは不相成儀に付弱兵には候得共御地へ參り居候常備兵隊どもへ方向不相失様厚く御手を着け被爲置度奉存候○此度之儀實に法外至極之事に御坐候間世上之評判元より一形ならざる事と奉存候萬々一も大政官御根軸之御動搖之響き有之候は實に天下之方向へ忽關係仕候事に付精々御盡力奉祈候○大巡察など參候は誠に困却至極其も同服同憂のものに御坐候得ばまた一助も可有之候得共今日之彈臺は則御國是之敵方に付此邊之處厚く御含み機宜可然御計らひ奉願候此極之處つまり長州之一手を以いたし度事に御坐候得ども逐々申上候通現場如何とも難致候故其極に至

り候は、無余儀

天兵も御願ひ無之は不相成趣に付其條理之相立候邊は得と御高慮之上可然御盡誠奉願候爲其草々頓首拜

正月六日

第五 障岳老兄御内拆

鐵面

(障岳は廣澤兵助)

五 穴戸璣宛書翰

明治三年正月八日

只今出勤仕候様にとの御事に御座候處只今竹田來疹いたし吳實に風邪とも違ひ屢下痢に甚困却仕候一兩日引しめ服藥候は、平癒可仕とも申候に付何卒御書中に相濟候事に御座候は、御示し奉願候又は甚奉恐入候得共諸君之内御來訪を玉わり候へは無此上難有奉存候偏に御了察可被成下候草々頓首拜復

正月八日

木戸孝允文書卷十 (明治三年正月)

七 木戸

(竹田は竹田祐伯)



六 森清藏宛書翰

明治三年正月八日

亂筆高恕

御一別後彌御壯榮に御盡力大賀此事に奉存候弟も其後浪華へ罷越御國之御様子承り見候處最早鎮靜に何事も無之歟之評判に付一安心仕候而歸國仕候處安外之騷擾に逐々御承知も可被爲成長官と兵士との分裂に今日様々之疑惑事出來荒作之上余り詰り而已候故歟大に惣之人心も相動き誠に以不容易體勢に御座候實に百日之說法水泡に屬し候姿にいかにも浩歎至極に奉存候誠に奉對

兩君上様候を奉仰かたき仕合に不一形

御苦慮に御座候何分にも挽回に至り不申は何ぞ長州御國而已之事に無御座

皇國之御爲奉深案候未東京に被爲居候は、諸兄被仰聞御高策御盡力只々奉願候

一 此度有富源兵へ手代一助と申もの北海道へ參り候に付東京に御出被成候歟又は已に北地へ御發し歟不奉存候得とも一書奉呈候同人もルルモツベへ問屋之儀奉願候いつ歟粗御嘶も申上候通相成候儀に御座候は、被仰付候様是願候民情其外近日之大様は此ものより御聽取可被成候先は其中時下御自玉第一に奉存候草々頓首拜

正月八日

尙々自然東京に御出被成候は、佐々木男也には早々歸國仕候様御迫り立可被成候老兄旁始多くは留守而已に實に込り入申候弟も歸り當分には巨細之事は得と相分り不申只々苦心仕候何分にも此後之處には屹度御挽回之大策無之は不相成事と奉存候拜

清藏 老兄

準一郎



七 野村素介宛書翰

明治三年正月八日

先以

御清適に引續き御盡誠奉大賀候弟も一昨夜服痛下痢甚敷強外出も不得仕困却此事に御坐候爾後形勢に御坐候哉只々懸念罷在申候大隊之處漸方尙相分り兼候折柄に付何卒公然屯集不相成ともとふ歟且々御維持之相成候丈けには御工夫被爲在度且又干城隊之處も軍艦長官も元より御疎不被爲在御事と奉存候得共無御拔目御着手只々奉祈候兼御内話之通境界内外之差別御坐候處たとへ境内に一先相治り候とも前途彌御體裁之相立候までは中々一艱難と奉存候觸耳目候事一々奉對兩君上候は實に恐懼之至涕泣之外無御坐候

(條岩二卿は三條實美岩倉具視)

○逐々傳承仕候處天下之響き不容易事歟と奉存候一應條岩二卿にても又は條卿にても大略之處御直翰にても被差越置候は、可然御事歟と奉存候

尙御高按之上可被仰上候兎角境界内に相濟候とも訖度御挽回之御方略は今日相立居不申は必御維持如何可有之歟と御按じ申上候一昨日御末家様方之御決論終に如何御決着に相成候哉奉窺度奉存候先は爲其草々頓首拜

正月八日

尙々會計先生達も實に御浮沈之際故大隊之方一條に付候も今一層深案祈居候事に御坐候御盡力奉願候且又民望之御取返しに付候は速に御好手段奉仰候拜

野村 老兄 極密御直拆

允

(野村は野村素介)

八 野村素介宛書翰

明治三年正月十二日

別紙只今差越申候御一覽可被下候折角昨今之際至于此遺憾千萬に御座候乍去一統引纏ひ謹慎仕らんか爲めとの主意に御座候付先於長府謹慎被仰



村置且御末家様方御手つゞきも已に御一決之事に付今日まで之御行が、  
りを以得と諸隊へ被仰聞候外致し方有之間敷一統之處も現に一纏に之謹  
慎仕らん爲めに申處は諸隊へも御示し相成候可然乍去此歎願書は先猥  
りに御示しは不可然と奉存候先は爲其草々頓首拜

正月十二日

木戸

(野村は野村素介)

野村老兄御直披

九 大久保利通・黒田清隆宛書翰

明治三年正月廿九日

拜啓過日は態々御光來被成下候處騒擾中に萬不敬而已相働奉恐縮候さ  
ては其後之病症彌頑固所詮緩和之藥劑に於は一向其驗も無之然る中には  
國祿已に盡んとするの勢他日  
天朝之御奉公も今日に有之候事と奉存候人臣之分不得止療治を盡し一激  
劑相用ひ候外致し方無之次第い細は兩先生御目撃之御事に付別に不申上

候兼之蒙御懇命此度之一條も御煩慮被成下候儀に付一應入御聽置申候先  
は爲其草々頓首

正月廿九日

尙々必竟至今日候次第報顔至極實に奉對

天朝候も恐懼無此仕合御座候敬白

(甲東は大久保利通黒田は黒田清隆)

甲東 兩老臺御直披  
黒田

允

一〇 南野一郎宛書翰

明治三年二月一日

遠藤も此折之儀に付片時も差念も實に彼地之都合も有之申候間是非明朝岩徳行之人出關無之は不相濟候  
只今は御苦勞至極に御坐候さては岩徳御兩藩被差越候人之儀はいかにも  
至急に付明早朝は是非々々出關之運ひにいたし度今日之光景は片時も迅  
速を貴ひ申候吳々も御合に之御催促可被下候尙其節三好野村二氏之内一  
名は明朝出關相成候様是又御通し可被下候先は爲其草々頓首

(遠藤は遠藤謹助)  
(岩徳は岩國徳山兩藩)  
(三好は三好重臣野村は野村靖)



二月一日

(南野は南野一郎)

南野 兄念

十四  
木戸

一 山縣彌八宛書翰

明治三年二月二日

(久我は久我四郎十川は十川東之助)

大亂筆御推讀可被下候久我十川之處必御盡力可被下候一將は難得萬幸は得易と實に此事に御座候萬一を誤り候も爾後彌御壯榮に御盡誠大賀此事に御座候實に此度之御國難古今未曾有の次第に片時も迅急に御回復無之てはいづれに仕候も所詮前途御維持之邊無覺束終に廿六日之暴動に至り候は天人之所惡實に人たるもの豈坐視する之時ならん哉依る終夜奔走漸大策相定め斷然鴻城を潛出仕道中も彼是故障に遷延仕昨今漸決策之手筈早々着手仕候東口之左右明日中には相達し候都合に御座候最前より

君上之御守衛甚懸念苦心仕候故凡今日之成行被通察候次第に付干城之迅急出鴻之邊も心急き屢及催促候得共一向其詮無之終に大機を失し候而已ならず今日之御苦難を不相辨兇賊に媚從し

(君上は毛利敬親) (干城は干城隊)

君威已に地に墮る之勢奮慨切齒之至に堪へ不申候逐々其情勢を想察仕候處所詮此御國難を挽回仕候などと申候事は不思寄候元より毫も干城は相手には不仕只敵視いたし候次第に御座候得共一發之上は成敗は忽御危急不可語之場合に相係り候儀に付精々は人心之方向も相定め置度付は何卒照武隊へ國司四郎如きものにも早急御出し被下是非々々大田に出張に相成候様御配慮偏に奉願候且又第一大隊長官梨羽又次郎と申もの順逆を不辨大に方向相失し居候に付是又可然長官數名御撰らひ被成何分とも照武と大隊之處は大田へ御繰出し被成下候様奉祈候無左候は大に戦之手筈齟齬仕候次第に終に全體之回復にも相係り候事に付吳々も御盡力奉願候せめて恩臣之中照武と大隊丈けなりとも此御國難に當り候もの無御座候は天下後世へ對し毛利御家之大恥辱も一洗候時は無御座と奉存候幾應にも御入はまり御盡力之處萬祈之至に御座候且又久我四郎十川東之助と申もの投獄に相成居候處御都合相成候は、破獄之譯になりとも御



内密御計らひ被下是非出獄相成候様御盡力可被下候則今六つヶ敷候は、  
一兩日中必外に一動可相生候間其機を不外必御出し可被下候間此事山根  
秀輔と作間某山口町方役人也へも内密相計り置候に付可然御差圖奉願候御館中兵糧等之  
御用意は申も疎之至と奉存候先は爲其草々頓首

二月二日夜

尙々干城隊之此度之始抹實に天下四方之大笑をまねきいかにも残念至  
極に御座候世臣などと申候も一向方向不相立如此  
君上之御危急に賊徒と共に屋を同じ食を共にいたし候などは慨歎之  
至に御座候何分にも照武と大隊は是非々々方向相立居候長官御出し速  
に大田へ出張事に應し吉敷峠へ進入之都合に内密御計り置可被下候大  
田へ賊に被據候は一大難に付吳々も御拔り無之様奉願候諸有司も定  
る御館中には不在と想像仕候久保翁は如何に御座候哉千苦萬憂一時に  
胸中に横たわり申候何も御降察可被下候誓る御回復を只々奉期候拜

(山縣は山  
縣彌八)

山縣 老兄極密御直拆

木 圭

一 二 内海忠勝宛書翰

明治三年二月六日

御國難之次第逐々御承知と存申候片刻も難捨置勢に付  
君意を奉體し一刀兩斷之所致に及び申候如此惡弊四方へ致波及候る實に  
皇國之一大事と奉存候此度大岡幾助差向候用事に付御地へ相登申候間い  
曲御聞取可被下候スナイトル銃之事は加賀權助子定る井上聞多より巨細  
承知之事と相考申候何卒至急御配意被下今二百挺ほど拜借奉願候是非々  
々御心配可被下候スナイトル銃彈之事も幾助より可申上候間萬端可然奉  
願候先は爲其草々頓首

二月六日

木戸準一郎

内海精一郎様至急

(内海精一  
郎は内海忠  
勝)



一三 内海忠勝宛書翰 明治三年二月六日

御手紙拜見仕候彌御清榮に御盡力奉賀候さて在港中は預御高意奉謝候懸御目候書類慎に落手いたし候さては折角入御耳置可申と奉存候事御座候に付則任幸便申上候其譯は御管轄内大山邊へ兎角浮浪潜伏爲致置候様子有之候由何卒極密に平生御探索被入置度所詮東京より被逐候ものなど此處に潜居候もの不少よし旅籠屋等も精々御詮議相成居時々御吟味有之度奉存候先は御答旁草々頓首

二月六日

孝 允

(内海は内海忠勝)

内 海 兄内拜復

一四 小幡高政宛書翰 明治三年二月十一日

亂筆御推覽奉願候

過刻一應入鴻仕候一昨日宇部兵之違約に而後拒之手筈相違仕百五六十人

(豊浦公は毛利元敏)

に而銃隊とも七八百人之襲來を相防昨朝は屹度進軍之覺悟に御座候所右之次第に而此上及奮戰候ときは可惜壯士之死傷不一形事に付不得止舉而引揚江良口より小郡口へ貫進いたし豊浦公を御迎仕候都合に而昨日四字過江良峠を乗取今日は是非小郡に相進候覺悟に御座候所賊勢思の外相弱りはつみも抜け申候然る上は一統相まとめ小郡へ引取常備ものどもは恭順謝罪候都合に御座候處殘賊德地へ潜み候由に而先手もの御館へ被召候由に御座候處逐付岩國始諸手入鴻可仕候間可相成は常備ものども一應引取被論付弟も登

館相憚り昨今

御館中之模様得と不相辨候間乍御苦勞老臺御登

館被成遣何分之儀御窺之上御一答奉願度此度之儀は正邪判然條理分明に相立不申るは後來之爲不可然と奉存候先は爲其取急早々頓首

二月十一日

木戸孝九文書卷十 (明治三年二月)



(諫早は諫  
早作次郎)

尙々干城隊之所致驚入申候諫早はまた存命仕居申候哉斷然御所致爲邦  
家奉仰候事に御座候以上

(小幡は小  
幡高政)

小 幡 様御直拆

木 戸

一五 伊藤博文宛書翰

明治三年二月十五日

亂筆高恕

(井上は井  
上馨)

春暖之節に御座候處彌御壯剛奉賀候さては御國難之事も遂に承知嘸御煩  
念と存申候井上など之歸國一日千秋と相待候得共其暴動最早難捨置終に  
斷然及討撃九日十日之兩戰にて賊徒落膽巨魁なども伏罪一先平定仕候不  
圖仕合に老骨も又陣頭に相立意外に苦勞致候御降察可被下候二月餘り  
之此大變動に政府も及大窮申候就るは拜借金之事歎願仕候外手段無之  
君上よりも逐々御相談被爲在御苦慮被爲遊候得共世間之都合も有之卒爾  
に難申出委曲作問正之助へ申含歸京爲仕候間得と御聞取被成下何分にも

御盡力只々奉願候先は爲其取急得貴意申度奉呈候其中時下御自玉第一に  
奉存候草々頓首

二月十五日

尙々吳々も御盡力偏に奉願候實に此度之變動は弟も意外之意外に一  
時之困窮無此上乍去先々積り通りに一應は相片付申候得共此後之始末  
容易には無之と奉存候

(大隈は大  
隈重信)

出京前御頼置申候支那之一條等簡便に相運居候様大隈氏へ被仰談可然  
奉願候外國官論に困り申候弟も支那丈けなりとも一應は罷越度存  
候

前原大に不快之説を相立候由彌真に御座候得は難被差置候山田氏など  
は如何之説に御座候哉先爲其以上

(前原は前  
原一誠)  
(山田は山  
田顯義)  
(春畝は伊  
藤博文)

春 畝 貴 兄 極 密

鐵 面 生



一六 内海忠勝宛書翰

明治三年二月廿一日

朶雲御投與致拜見候彌御清適に引つゝき御盡力大賀此事に御座候さては  
 大岡幾助御地差越候に付るは不一形御高配被成下候由忝奉存候然る處九  
 日十日兩日之戰爭に於賊徒も大概降伏及平定候次第に付器械彈藥等も最  
 早不用に付相求め候分は致し方無候得共如貴論未買得不仕候得は無益に  
 屬し候間御差止め可被下候自然も余分相求め候事に御座候は、合間等少  
 々損失有之候とも賣拂候不苦何卒可然御駆け引可被下候色々御手数何  
 とも御氣の毒に奉存候且又殘徒段々脱走いたし京攝をさし罷登候ものも  
 有之候哉に相聞へ申候萬一御地邊に於もいか様難事出來候歟も難計此上  
 朝廷之御厄害引起し候は實に不相濟何卒嚴重に御取締近地等も御探索  
 被下潜伏等仕居候は、是非々々御捕縛可被下候此度之一條誠に不容易次  
 第に於天下にまで相響き候事に於薩州などにても大に御懸念西郷吉之助  
 始急速被差越候位之事に於此上脱走之もの又々妨害をなし候は益不相

(西郷吉之助に西郷隆盛)

濟精々御取締御探索之事奉願候先は此段得御意申度奉呈候其中時下御自  
 愛第一に奉存候草々頓首

二月廿一日

尙々幾助よりも書狀差越候得共此段老兄へ申上候間別に及返答不申候  
 間乍失敬此段御傳へ可被下候且また内藤絢太と申候もの御地に於艦便  
 御頼仕候歟も難計急々東京へ被差越候に付乍御手数可然奉願候以上  
 歎願書類等御送り申候間京攝其外へも不審を立候ものへは御示可被下  
 候尤貴兄御合に於御取計らひ奉願候

内海 精 一様

木戸 準 一郎

(内海精一は内海忠勝)

一七 西島青浦・小野勝三郎宛書翰

明治三年二月廿二日

八五郎へ刀劍を拭ひ置候様御さし圖是祈

足下も無事余も無事今日は殊之外多忙故緩々相認候事出來不申此段任幸



便一書如此候草々

二月廿二日

(青浦は西島青浦)

尙々東京の近情序之節御通相待候青清子書狀到來一々披見いたし候圍地之事も不一形心配之由梅も可成丈植付度杉がきより余の木に候へは別るよろしく候へども最早植付相成候へはいたし方無之候何もよろしき様丸々御頼み申候皆々へも可然加藤福井二氏へもよろしく御傳言頼入申候作間歸京に付爰元之近情一々御承知可被下候以上

(加藤は加藤弘藏カ) (福井は福井順道) (青浦は西島青浦小勝は小野勝三郎)

青浦 小勝 内密

孝允

一八 品川彌二郎宛書翰

明治三年二月廿五日

亂筆高恕

(松本は松本照)

御尋申候處折悪敷兩兄とも御外出中に於殘念此事に御座候松本兄御上國

(田中は田中光顯カ)

之一條田中より申出候邊も有之一先見合置申候何分にも東西京へは探索人等眞に本氣に於相盡し候もの罷出居不申は果而往々之御不都合如見に被思申候倍臣に於も何にても此折柄東西京へ罷出必至に右邊之爲め盡力いたし候もの有之候は、御尋出し可被下候大分に東西京へも走り候もの可有之と被相考申候たとへ今日不出とも果して出候には相違無御座候且又此度常備之歎願書も何卒上木にいたし世間へも相示し度どふぞ御盡力可被下候先は爲其草々頓首

二十五日晚

(此書宛名署名を關く明治三年二月二十五日) (木戸孝允が品川彌二郎に贈りしものなり)

一九 尖戸璣宛書翰

明治三年二月廿七日

何卒民間之方向相立候様には精々御盡誠奉願候脱隊之罪狀も一つ書に廉々相認候分尤分り安く可成丈け速に上木にも相成候は、世間へ御示し被

木戸孝允文書卷十 (明治三年二月)

二十五



爲在度奉存候元より御疎は不被爲在御事と奉存候得ども一日にも如此事遷延仕候るは不宜候間各部署へ厚く御手を被爲着度奉存候先は爲其草々頓首拜

二月廿七日

尙々杉民治相認書告諭書中隊中のもの共云々之字を脱隊中のものと御認に相成度隊中之もの云々と有之候るは世間にも自然迷ひ候氣味有之候由に相聞申候書中に隊中之ものと認有之候處不少候此段毎々申出候もの有之に付不取敢申上置候以上

(尖戸は尖戸境)

尖戸 様御直拆

木戸

二〇 大津四郎右衛門宛書翰

明治三年三月一日

爾後如何被爲成候哉日々御快方と奉存候弟も過日三田尻へ罷越今日は不快に引込居彼是に御無沙汰申上候ミルク残り居申候間差出し今少し

御用ひ被成候は、可然歟と奉存候先は爲其草々頓首

三月一日

鐵面生

松屋 先生御直

(松屋は大津四郎右衛門)

二一 尖戸璣宛書翰

明治三年三月二日

亂筆高懸歸順之兵卒等にも各部々々へ歸籍被仰付候に付は御告諭書罪狀等も前以一般へ御示しに相成候事一過日は御返書御投與奉拜誦候爾後御風氣如何爲成候哉爲邦家片時も迅大急務に御座候所遷延至今日いかにも爲君爲國爲民遺憾至極に御座候何卒被仰聞候小吏へ實事御責め被爲在度奉速に御快復奉祈候且又各部へ御告諭書等分配等之邊不容易御配慮之由實に奉感佩候如此大刑之被爲行候御事誠に不得止次第とは奉存候得共一昨年來之御様子を奉窺候所薩土どもとも違ひ内外之氣脉不相通人民勝手之迷ひに任せ勝手之思ひに任せ時勢に隨ひ御誘導之御手立等は一尙不奉窺必竟不教民と申氣味も有之申候其證は山口と萩と之間時情不通こと如他國各部中にあも 御一新後は眞に子年已前に相復し候事と相考へ頻に盡力して攘夷等之事を説候もの不少由更に大勢之變遷仕候事は知り不申



君上之御膝元而已時勢を知り候とも百萬人之人民迷惑仕候様に於ては御國内紛亂之絶へは無御座と奉存候此度之一條に於ても已に二十日過に至り元より愚民之迷ひ一朝に難相解事に御座候得ども如此嚴重御所分とも有之候事に付ては尙更其已前に告諭書罪狀書等も各部畔頭已上は不及申且々字を知り候ものへは兎に角御示し位有之候然る後刑事も被行候様に有之候得は實に

君上不被得止罪人は御誅戮被遊候邊之事も聊徹下仕候と奉存實はやケ間敷逐々申上候事に於て御座候此度之事に於ても愚民等に先上を疑わして然る後説諭仕候様に於ては竟に

君上之思食徹下仕候期は無御座と奉存候告諭書罪狀書等之事も已に十五日之余に相成今に行届不申とは實に泣血之至に御座候折角先生には厚く小吏へ御差圖被爲在全小吏どもの懶惰と残念至極に奉存候今少し其小吏ども職を盡し國家之かゝる御大難を願み聊

君上之思食徹下仕候様御叱り被爲成候は如何哉と奉存候今日之事已に々々機を失へり乍去片時も迅急に御示し有之候得は其丈之御益も可有之と奉存候先は爲其申上候草々頓首拜

三月二日

鐵面生

(敬字は尖戸魂)

敬字 先生御密拆

二二 榎村正直宛書翰 明治三年三月三日

亂筆高怨御一見後必御火中々々

爾後彌御清剛御盡力大賀此事に御坐候さて御國之變動も言語道斷なる次第に於て終に此度

勅使も御下向に至り對他方候も赧顔之仕合に御坐候乍去存外迅速に平定に至り先々一安堵に於て御坐候乍去前途之處一入御大事と奉存候逐々脱走之徒も四方に相散し必京攝を心懸け罷登り候ものも不少由元より御疎

(勅使は宣撫使徳大寺實則)

木戸孝元文書卷十 (明治三年三月)

二十九



は無之事に御坐候得共十分に御着手御拔り無之様御取締奉願候東海道邊へも御手相立候事に御坐候は、其々御着手是願候元來此元因は外より大に煽動され候事不少内輪は又大油斷に、一向其邊之覺悟無之且大體之處近來内外之情實は丸に不通に、大勢之變遷いたし候事政府を始め不案内に、萩城鴻城之間も其情實如他國愚民誘導之道とては更に無之終に如此大騒擾に至り申候實に御地之處は他と違ひ俗論徒不平黨之巢窟に、始終天下之事煽動之始は西京第一に御坐候此度之一條も大に御地に係り又逐々御國よりすら上京いたし候もの其仲間に入實に人心之方向を亂り候事不容と奉存候實に引つゝき御苦心憂慮察致候乍此上土地之人民莫々自然と開化に趣き候様御誘導之策只々仰處に御坐候御取締り方に、亦も御無人に、御困りに候は、早々被申越度屹度根本相締り人民之方向相定り候までは御地は決、油斷不相成また手も不拔事と存申候于時又千萬御手数恐入候得ども御地之小學校に、上木いたし候一力主人等周旋之童蒙に

示し候書弟聊跋言を加へ申候分急幸便御坐候は、四五十部早々御送り被下度代價之處はあとより返上可仕候先は、旁得貴意申度一書相呈し申候其中時下御自玉第一に奉存候草々頓首

三月三日

鐵面生

(十八眞は横村正直)

十八 直 兄極内密

二三 貞永幽之助宛書翰

明治三年三月三日

彌 御清安大賀此事に御座候過日は登門乍早晚御高意奉謝候さては千萬乍御手数御序に雲師へ過日相頼み置候一帖へ揮筆之儀御催促可被成候題末に、亦も爲松菊生と認めもらひ度何分可然奉願候先は其爲草々頓首

三月三日

木 圭

(貞永は貞永幽之助)

貞 永 兄御直拆



二四 内海忠勝宛書翰

明治三年三月三日

亂筆御推讀左候御火中可被下候

爾後彌御清剛に御奉職大賀此事に御座候さて御國脱走もの一條に付候も  
 も不一形御配慮と想察仕候其外段々相散し候ものも不少趣に相聞へ申候  
 元來此元因は京都邊浮浪之徒と相合し神戸邊を騒わがし候手段なども最  
 初有之由御地之處は別御取締り申上るも疎と奉存候實に此後とても油  
 斷相成不申候此度薩州も江戸詰は余程俗論之由に有有志之ものども舉  
 立腹いたし居候處國元之御論確乎に殊に西郷老人など少しも交誼を不  
 失態と來國いたし候様之次第に一統感服いたし候自然江戸論之如きに  
 是は又々破裂に至り候も難計候土州容堂公之於江戸は確乎たる所を以大  
 に御維持有之候由此往之處世間今一入相締り一統之方向相定り候迄は御  
 地などは別御苦慮と存申候精々乍此上御盡力奉祈候御序に知事へも可  
 然御致意奉頼候于時此度脱走もの一條に付第四大隊之もの八人東京被差

(西郷老人は西郷隆盛)  
 (容堂公は山内豐信)

登申候自然御地より飛脚船へ乗込候都合に御座候は、御多事之央御面倒  
 至極に御座候得共御世話可被成下候此段御頼仕候先は右旁亂筆を呈候其  
 中時下御自玉第一に奉存候草々頓首

三月三日

尙々千萬申上兼候得共急々之幸便御座候は、ビール一箱御送り方相願  
 われ申間敷哉代金之處は罷登り候節返上可仕候相成事に御座候は、奉  
 願候且又別紙乍御面倒慥なる便りを以京都へ御送り可被下候以上  
 鏡屋政五郎之處定宿よろしからすに付先達御作間正之助へ申含置候長  
 州定宿相定り居候は、御聞せ可被下候

(作間正之助は作間正臣)  
 (内海は内海忠勝)

内海 兄内密

允

二五 南貞助宛書翰

明治三年三月四日

亂筆高恕

木戸孝元文書卷十 (明治三年三月)



爾後御清剛奉大賀候過日は御光來奉謝候其後早川氏出鴻之節御建白書御託し慥に落掌仕直に政府へ差出し申候定る諸君子披閱相成候事と奉存候弟も如御承知昨春來始終不快に人々之隱憂も不少此際朝廷上へ相立候とも却る心に悖り候事に眞に不相安遂に百万方歎願仕候る退養いたし對天地候るも悠然たる心地始る仕少々不快も直り申候此春は墓參旁歸省仕候處不圖之次第に元より常備へも脱隊へも關係無之身上に御座候得共亂暴之末終に君威之相立候處も無之米穀金錢も兵卒之勝手落入り國家之危き實に累卵恐多くも君上之御心中も奉恐察候るも只々胸に塞がり不堪泣血一時は狂氣に至り候歎とも覺へ候仕合に乍微力一身を聊相盡し度と偏に存込候處不圖諸有志之奮勵且第一には君上之御威光御支藩方之御誠心にも且々今日之御回復に至り實に奉大悅候付るは最早弟之漫に口を開き次第にも無之昨年來之宿志も有之不可盡之心事却る今日横行仕候るは第一爲君上且諸人之爲にも不相成と奉存何事

も御斷り申出且不快にも有之申候間退養仕居申候老兄兼る御降察被下候事に付一々不能陳述し且また過日早川氏より養子を弟へ託し東京へ出し候と歎之一談も御座候處弟も右之仕合に此後之處も一向着眼不相立實に於東京も様々故障不少其場に強而相斷り候譯にも參り兼元より一應は相斷り置候得共何卒老兄弟之心事御降察之邊を以得と情實御通し可然御斷り奉願候歸り候以來是等之事も如山に御座候處且々相謝し申候御汲取被成下吳々も不惡様奉願候先は一應之御返事且御願旁奉呈候草々頓首

三月四日

尙々御地之光景は如何に御座候哉段々御話申度中々心事不被盡不被描

盡候何も昨年退養之志を相守り居り申候御察可被下候以上

貞助 老兄内密御火中

鐵面生

(貞助は南貞助)

二六 小幡高政宛書翰

明治三年三月五日





亂筆高恕

爾後彌

御清榮奉大賀候さては御約束通何卒御滯萩中に是非罷出度奉存候過日

(勅使は宣撫使徳大寺實則)

勅使御下向旁に於兩三日甚繁多引つゝき少々不快に於四五日丸に外出も不得仕漸今日より快氣仕候今兩三日も仕候はゞどふ歟脱走も出來可申と奉存候御地之事も種々風説有之今以更御方向不相定と申事も御坐候如何之光景に御坐候哉余り不面白世界に御坐候得は出萩仕候も實に殺風景と奉存候當地詰之干城隊は十に七八は合點も余りに歟と被相察大に奮發之歎願書も出居申候最初より盡無心と申譯に於も無御坐候事に付不失此機御誘導之御手段も有之度事と奉存候乍御手数數御一答時情御示被成下候得は別々難有奉存候先は爲其草々頓首拜

三月五日

尙々

北堂様始可然御致意奉願候定而御神筭通り此度は御蹉跌無之日夜御實行被爲舉候御事と奉想像御羨申候於弟は彌薄命之至り御降察可被遣候拜

餅山 老 臺御内拆

鐵面生

(餅山は小幡高政)

二七 名和緩宛書翰

明治三年三月九日

爾後彌御清剛に御盡誠に大賀此事に御座候さては御國之風聞も逐々御承知可有之一時は實に大變に於御座候意外之事に於甚當惑いたし候始終如此様に於は終に

皇國も自ら破り候様相成浩歎之限りに御座候一先鎮靜に及び申候付而は脱敗卒越後へ罷越候風聞も有之且攘夷徒も入込候と申風聞も御座候に付屹度御取締御取押へ有之度無左るは實に如何之害を生し候歟も難計油斷大敵と存候萬一捕縛人等御不足に御座候は、別紙政府之御用狀之返答人

木戸孝允文書卷十 (明治三年三月)

三十七



之事も被申越候は、早速越後へも差出し可申候弟は不遠外出候故政府へ被仰越候もよろしく候東京よりにも捕縛人越後へは、

朝廷よりも被差出と存申候別冊書面類御送り申候間異論を生じ候ものへは御示し可被成候申陳儀海岳に候得共取紛得盡不申候先は爲其草々頓首

三月九日

緩 兄極密

(緩は名和)

二八 横村正直宛書翰

明治三年三月九日

爾後引つゞき御配慮と奉存候さては幸便故別冊御送り申候間相成事に御坐候は、世上へも寫して御散らし可被下候且又逐々脱走之徒有之大樂源太郎鈴木静雄之如きは實に世間におゐても大害を可成と一統懸念いたし候大樂は堺邊に知已有之と申評判有之申候精々御探索是祈候先は爲其取急草々頓首

三月九日

鐵 面

(十八眞は横村正直)

十八 眞 兄内密

二九 杉孫七郎宛書翰

明治三年三月十三日

亂筆高恕弟も目的稍相定候に付今夜より鳥渡西京へ参り申候無目的之間はいか様被責候とも困迫而已此度は世外もせひ引出し候積りに御座候

先以御清適奉賀候弟且々消光御放意奉願候于時弟も如御存苦情不少是非此度は素志相達西京へ居所を占め可申と奉存候處先達より大久保伊藤等にも段々被相責且又板垣どもよりも段々預議論候處終に其末大久之方も板垣之方もいづれも愚見に随ひ違存無之と申事に付無據一先東行と決し申候尤現場之都合如何至り候哉は難計候得共先之次第に巨細之事は筆頭に難盡不日拜青之節と申縮候野村穴戸山田等へ御逢被成候は、御含

(大久保は大久保利通伊藤は伊藤博文板垣は板垣退助野村は野村素介穴戸は穴戸山田は山田顯義)



を以可然御通し奉願候乍去世間へ兎や角と相響き候は不宜候間必他へは御内々に奉願候其中御自愛第一に奉存候草々頓首

三月十三日

尙々御序之節高輪様へ可然被仰上歸京之事は御申上可被下候よろしく奉願候草々

(笠墩は杉孫七郎)

笠墩 老兄御内密 御火中、

松 菊

三〇 尖戸璣宛書翰

明治三年三月十四日

亂筆高恕

爾後彌以

御清適に御盡誠奉大賀候さて頃日在職進退等之事も被仰出候由一應御一新之御次第も相立重疊と奉存候別何歟御配慮と奉想察候然る處前途之儀は實に御大事に天下大勢之變遷は中々人力之及ぶ處に無御坐強

他へ先じ候名目之改正等有之候は實以不可然事と奉存候得共少々は其機に先たち下より被致ぬ丈けには御着手無之は往々之處御維持之邊も必御六つヶ敷と奉存候尤一般之きまりも相つき大勢も相定り候ときは決る如此際には有之間敷一二十年之間は要路之面々之苦心苦勞實に尋常之事に於て天下諸藩いづれも参り不申と被思申候今日之勢第一朝廷よりも土地人民を猥りに私被成候譯に於て無之朝廷之事も乍恐至尊御一身上之御入費はは眞に十五萬石と被爲定候位之御事に付自然といづれも皇國を顧み誓ふ萬國へ對立之御實行相舉り候様に盡力不仕は往先き藩は藩に對し候難相立次第に相成申候今日之處實に御大事と奉存候今日其御目的相立候ときは彌以萬世大丈夫と奉存上候杉野村兩氏などは少し御日合も相立候は、早々權大參事に被召出度氣脈相絶候様之事御坐候

(杉は杉孫七郎野村は野村素介)



はまた世間不穩と奉存候元より御疎は不被爲在御事と奉存候得共任序申上置候且又一昨日

(君上は毛利敬親)

君上之御書を拜戴奉り候

君意實に恐縮感泣に堪へ不申慎る奉拜見候此上は何も

君意に隨ひ奉り決る緩急之事不申上眞に

思食之邊御至當と奉存候付るは別に御請之申上様も無御坐候間何卒 先生より此段可然被仰上宜御取成偏に奉願上候此一事は丸々 先生へ奉願

付るは別にいづれへも不申出候間吳々も不都合無之様伏る奉願上候先は

御願ひ御見舞旁奉呈候漸々世上之方向も相定可申何分にも只々速に

君意徹下仕候様不堪千禱萬祈御序も御坐候は、今日之光景御示し奉願候

草々頓首九拜

三月十四日夜

向々湯川兵馬北海道行之事相願ひ可被仰付哉にも御詮議相濟居候御様

(湯川兵馬は湯川平馬)

(數馬は相村數馬)

子於弟も可然事と奉存候乍併凡前途之目的は御論決に御遣わし可然と奉存候無左るは欲開る却る往々不開様に自然と立至り可申候最初之目算實に肝要と奉存候今朝も兵馬弟へも相論し候に付い曲先生又は數馬翁之間へ可申出と申置候可然御指揮奉祈候以上

(敬字は尖戸境)

敬字 先生御内披

松菊生

三一 吉富簡一宛書翰

明治三年三月十五日

亂筆御推讀

(井上は井上馨)

(佐藤は佐藤與三左衛門)

過日御手紙御投與致披見候赤關へ井上氏一同御出浮之よし彼是御心配と御察申候佐藤へも未面會不致候得ども御手帖は相届け申候彼も實母死去に忌中に御坐候先日相尋吳候由候へとも出違ひ申候萩城之光景も都合平穩乍去何も如他國元より天下之事情御一向不通是等は必竟是迄政府之落度と相考申候政府は國內之ものを誘導する之役人にも候得は不弁時勢



不心得之もの如山如海出来候而終に不得止所嚴罰候は實は面白きはなし  
に而も無之何卒此後之處は屹度警戒天下之變遷等隨而人々之耳目に入り  
候様當路之人必至盡力無之而は不相成其々御同志之人へも平生御論し置  
政府一緩之折は無拔目忠告いたし度たとへ誰が居候も元因を顧み着手  
不仕るは何事も五十歩百歩と相成申候決而俄に事を急き候は不宜只此上  
は漸を以大略之相立候處を實行をそろりと相擧げ候外良手段無之左  
候へは六七年之後には力相應之眞之有用國と相成申候先は御答旁草々任  
幸便候頓首

三月十五日

鐵面居士

箭原 兄内密

(箭原は吉  
富簡一)

三二 長屋又輔宛書翰

明治三年三月十八日

過刻は朶雲御投與折柄外出中に御答も不申上失敬仕候明日は必參上可

(小幡は小  
幡彦七小川  
左衛門太郎)

仕候小幡小川之内輪よりも罷出候歟も難圖候様被思召可被下候さて此品  
千萬輕薄奉恥入候得共呈上仕候御笑留を玉わり候は、難有奉存候草々頓  
首拜

三月十八日

木戸

(長屋は長  
屋又輔)

長屋 様御直拆

三三 木梨信一宛書翰

明治三年三月廿三日

爾後貴恙如何被爲成候哉逐日御快方と奉察候過日正木泰藏より深溪御出  
之事承知仕候に付御尋可仕と奉存去る十八日一書差出置廿日に罷越候處  
已に御出立後に御跡も無之近頃残念至極に奉存候一書差出し置候分は  
照明市之目代御届け仕候事失念いたし弟深溪へ罷越候後相達誠に心外千  
萬に御坐候何卒此折に訖度御保養被成置度弟東行之節は是非とも御供仕  
會る御嘶仕候良醫へ御託し被成候様仕度いつれ拜青可申上候此頃御步行

木戸孝元文書卷十 (明治三年三月)

四十五



は御六つヶ敷候哉相叶候得は明日當幽邃之地へ御供仕度何分之御様子御  
一答奉願候草々頓首

三月廿三日

松 菊

(梨花は木  
梨信一)

梨花 盟 兄

三四 穴戸璣宛書翰

明治三年三月廿六日

(廣澤は廣  
澤兵助)

御手昏奉拜見候海軍款願書其外早速御送り被遣難有奉存候已に廣澤始東  
京諸友よりも書狀御國之事情におゐても今少し遷延仕候と天下之患害不  
容易今日承り候も臆之寒きこゝち仕候

(大隈は大  
隈重信)  
(伊藤俊介  
は伊藤博  
文)  
(正木は正  
木退藏)

○御拜借金之事作間正之助差歸候折大隈大藏大輔へも入々相頼越申候處  
此度格別之心配に而如御内願成就仕候由伊藤俊介も種々心配仕候様子大  
隈よりも且又正木どもよりも申越元より頓に會計局へも申來り候事と存  
申候此後御返濟之處御不都合無之様奉願候實に此節世上金詰之事に御座

候間大隈等も余程の苦心と被相察且他へ之響きも有之誠に六つヶ敷事に  
候處御都合克參り候事に付一應御相<sub>て</sub>拶も有之事と奉存候い細は拜青可申  
上候

○土人之處は過日御答に申上候通可然奉願候是非面會仕度との事に御座  
候は、來萩仕候様御傳へ可被遣候先は御答旁草々頓首奉復

三月廿六日

井上聞多自然書狀ども御願仕置候は、御序に御送り奉願候

敬 宇 大 先 生 内 拜 復

松 菊

(敬宇は尖  
戸璣)

三五 兼重讓藏宛書翰

明治三年四月三日

亂筆高恕

過日は朶雲御投與奉拜誦候先以御清適奉大賀候吉富之書狀をも儘に落掌  
仕候歸鴻之上何も可申上と奉存候内不圖一日々と長滞に相成申候いづ

木戸孝九文書卷十 (明治三年四月)

四十七



れ兩三日内には歸鴻可仕と奉存候別に吉富へも返書不仕候間御序之節可  
然御致意奉願候先は御答旁一書奉呈候草々頓首拜復

四月三日

松 菊

(桐塙は兼  
重護藏)

桐塙 老臺

三六 小幡高政宛書翰

明治三年四月四日

(廣澤は廣  
澤兵助)

昨日御嘶之趣廣澤氏へも相談し今八日過より一同參堂可仕と相約し置申  
候間此段申上候勿々頓首拜

四日

竿 鈴

(餅山は小  
幡高政)

餅山 老臺

三七 西島青浦宛書翰

明治三年四月十二日

(勝三郎は  
小野勝三  
郎)

亂筆御推讀花樹等の事も勝三郎と得と相談被下候

書狀逐々相達致披見候彌無事と珍重に存候御國も不圖變動に何歟と彼  
是鎮定後も手間取歸京も及延引申候いつれ五月中旬頃には是非歸り可申  
と存候留守中も何歟御心配と存申候

一 園地へも梅樹數種栽付相成候由何卒清淨にいたし種々之少圭樹種々  
之花草等梅樹之間に栽付四時様々之花相開き候様いたし度四時いつも花  
之不絶は誠に面白きものに花花草花樹佳樹之間を徘徊相成候様に路徑を  
なし面白き趣向に様々御栽付させ可被下候海棠椿類ばけけまん草春蘭え  
にしたつちあやめ夏菊秋菊寒菊石榴黃蜀葵芍藥牡丹秋棠きよふ女郎  
花臘梅山茶花類水仙其他種々之花樹草多きがよろしく候掃除等は、貞等  
へも申付可然御指揮頼入申候

一 福井加藤齋藤井上いつれも無異と致遠察候齋藤には末弟死去之よし  
嘸かし舉家愁傷と察申候別に書狀出し不申に付見舞之品を持參に、爰元  
より申越候趣を以悔みに來訪之事を頼申候勝三郎兩人内に、よろしく御

(福井は福  
井順道加藤  
は加藤弘  
藏カ)  
(齋藤は齋  
藤新太郎井  
上は井上新  
一郎)



座候先は爲其草々以上

四月十二日

尙々時下御自愛第一に候

青甫子足下内密

允

(青甫は西島青浦)

三八 大久保利通宛書翰

明治三年四月二十日

亂筆高恕

拜啓薄暑之節に御坐候處先以 御壯榮に御奉職奉大賀候過日は態と御國より朶雲御投與難有奉拜誦候弟も舊國波瀾之末彼是取紛歸京仕候邊も不圖遷延申候此度舊寡君に陪し明日より御國へ罷在申候いつれ來月初旬には歸國老舊寡君一同來月中には東上仕候心得に御坐候逐々世上之光景傳承仕候處兎角何歟と人心を煽動仕候邊之事も有之候由實に不一形御苦慮と奉遙察候前途大目的之被爲相立候上は急迫に御進歩有之候も世上一

統弱足之ものは御沙汰通に得運ひ不申氣味も可有之歟と奉存候乍去一旦御發令に相成候上にも妨害いたし候ものは斷然御處致無之は所詮御政體之相立御國威振起仕候期は有之間敷歟と奉愚案候萬々一も要路中に面從腹非之徒有之候は乍恐  
朝廷上之事も早晚無賴不平之徒齒牙に而已に相かゝり候様成行痛歎血泣之至に奉存候老臺御歸京之上は是等不足憂事元よりに御坐候得共時々西京近邊九州邊之事など承知仕推考仕見候へは又今日之事不容易と不堪杞憂候舊國之處且々鎮定御放慮可被遣候先は任幸便一書奉捧呈候其中時下御白玉爲 邦家第一に奉存候草々頓首九拜

四月廿日

松菊 狂夫

(此書宛名を闕く明治三年四月廿日木戸孝九が大久保利通に贈りしものなり)

三九 伊藤博文宛書翰

明治三年四月廿一日

木戸孝九文書卷十 (明治三年四月)

五十一



(山田は山田顯義)  
(井上は井上馨)

亂筆高恕山田氏へ吳々可然御致意奉願候  
過日は度々朶雲御投與一々拜誦仕候彌御壯剛に御盡誠大賀此事に御座候  
井上も已に出發後に付御書狀も其儘差置申候頓に御而會と奉存候御國も  
中々十分には行届兼申候得共小改正は仕置申候最早前途之目的丈けは左  
まで之違ひ有之間敷歟と相考へ申候乍去何事も只々乘勢只盟兄之新開策  
と同一轍に付不承知ながらも無理押へ致し候丈け之事に而御座候決而安  
心は出來かね申候來月中には老公御供仕候而東上之覺悟に御座候間何も  
其節と申縮申候中々筆頭に難盡候金策論は不容易御高慮と奉存候先は任  
幸便一書奉呈候草々頓首拜

四月廿一日

(小松屋は小松謙次郎カ)  
(大隈は大隈重信)  
(江藤は江藤新平)

尙々馬關之米論に付意外之故障出來仕居申候弟大決斷を以決而  
朝廷之御損失無之様には盡力仕候覺悟に御座候必竟は小松屋之不心得  
歟と相考へ申候大隈氏へも可然御致意奉願候過日江藤は不慮之事に而

(大木は大木喬任)

疵を受け候と歟申事承知仕甚懸念仕候最早癒仕候哉御序之節江藤大木  
どもへもよろしく奉願候以上

(芳梅は伊藤博文)

芳梅 老兄御内拆

鐵面

四〇 作間正臣宛書翰

明治三年四月廿一日

亂筆高許

爾後彌御清適大賀此事に御座候さて過日は朶雲御投與拜誦仕候金策一條  
其他彼是不一形御配慮と奉存候弟も歸京不圖及遷延申候いつれ來月中に  
は  
老君上御供仕東上仕覺悟に御座候段々得貴意度儀も御座候得共不日拜青  
之節と申縮候御國も小改正は仕候得共中々徹底之場には容易に至り兼申  
候乍去大略之處は目的不相違丈けに此度は精々乍不及盡力仕候先は爲其  
草々頓首



四月廿一日

尙々長松岩谷其外へも御序に可然御致意奉願候以上

栖 夢 兄御内披

鐵面生

(長松は長松岩谷は巖谷修)  
(栖夢は作間正臣)

四一 吉富簡一宛書翰

明治三年四月廿七日

亂筆御推讀甚助其外へも可然御致意是祈

爾後彌御清剛御心配と御察申候例之一條も必竟は大藏省之御損と相成候ときは隨ち世外老人も不知事とは乍申不都合故不得止盡力もいたし候譯に付萬々一も余り第二之勝をむさぼり自然も又候異變之形勢と相成候は不面白且また小謙も維持出來候得は俄に餘計を強ち企候は必不可然歟に相考申候何分とも御駈引是祈候○八谷藤太へ相頼みたばこ入打忘れ置候に付兄へ直に此段御嘶申御預り置被下候様傳言いたし置申候頓に御承知とは存申候得ども尙爲念御頼仕置候どふぞ歸り候まで慥に御預り置可

(世外は井上馨)

(小謙は小松謙次郎)

被下候玉は少々譯あるものにて御坐候乍去美人之嫌疑は決ち無御坐御安心可被下候必御頼仕候長崎へ漸過る廿五日四字に着艦いたし候昨夜來風雨に於今に揚碇不得致兎角遷延と相成候には困り入申候崎陽も甚寂寥會ち御同行いたし候ときは大分相違ひ候歟と相覺申候草々以上

四月廿七日

鐵面

樂水 兄内密

(樂水は吉富簡一)

四二 大久保利通宛書翰

明治三年五月六日

任幸便一書奉捧呈候向暑之節に御坐候處先以御壯榮に御盡誠奉大賀候さて此度山口知事鹿兒島表罷出候に付弟も一同參上多勢不一形蒙御配慮奉恐入候九州邊も都合靜謐に御坐候處久留米一藩中之様子始終朝廷今日之御主意に忤り隨ち浮浪之ものも少々入込此風豊後邊之小藩へ波及いたし候風聞或は薩或は長なと、人心を煽惑仕候氣味不少此上は益



朝廷上確乎條理判然たる處を以妨害をなし萬生之方向を迷亂いたし候も  
のは大小衆寡を不問明瞭御處致被爲在度無左るは積年之事却る今日に至  
り水泡に屬し候而已ならず爲後來不可拔之患害を醸しは仕間敷歟と苦憂  
之至に御坐候此行兎角蒸氣等相損し不圖時日遷延仕候當月下旬來月上旬  
之間には舊藩從二位も必東上可仕其節は從行仕候覺悟に御坐候間何も拜  
青と申縮候其中時下 御自愛爲 邦家奉萬祈候草々頓首九拜

(從二位は  
毛利敬親)

端午後一日

二白乍失敬御舊藩諸先生へ可然御致意奉願候敬白

甲 東 先 生 御 内 拆

鐵 面 生

(甲東は大  
久保利通)

四三 伊藤博文宛書翰

明治三年五月十三日

彌御清適に引繼き御盡力と遙察仕候過日吉田より一書到來御様子も逐一  
承知大に安心致候定る當節はげだひも一變候歟と察申候何卒かく屋も舞

(吉田は吉  
田右一)

(伊集院は  
伊集院金次  
郎中村は中  
村半次郎後  
桐野利秋)  
(素狂は山  
縣有朋鳥尾  
は鳥尾小彌  
太)  
(東行庵は  
高杉東行  
庵)  
(世外は井  
上馨)  
(大田は御  
堀耕助)  
(大人は伊  
藤十藏)

台も拍子相叶かすと只々祈念仕居申候先日伊集院中村兩氏一同素狂鳥尾  
二子も上國此節は御落命合と想像仕候御地光景如何於今日前途之大策も  
一定仕かすと只々祈念奉り候東行庵之事も御承知と奉存候御同様に知已  
九は不可看人と相成殊に此子之如きは遺憾尤深何も不忍述素狂子より御  
聞取可被成候世外子も孤劍遊天之覺悟と相見へ頻に去國之念勃々大田氏  
も段々相ととき申候然し是また依る起る處有之實に氣之毒千萬痛心仕居申  
候○弟も去月出萩候處北堂君兎角不快之御様子しかく無之御見舞申候  
處半は兄之事も御懸念之よし入々申解き置候其後大人より承り候得は少  
し食などもすゝみ候よし先御安意可被成候幸便も有之候は、御便り可被  
成候先日吉田氏之書面之趣に於ては今一模様により兄には御歸國被成候と  
歟就るは最早此節は御立にも相成候事歟と奉存候其後爰元相變り候義も  
無只々御地之様子而已相待居申候申上度義も如山拜青と相期し居申候其  
中時下別る御自玉第一に奉存候何卒田中兄へも御序に可然御致意奉願候

(田中は田  
中光顯)



勿々頓首

五月十三

竿 合

(芳梅は伊藤博文)

芳梅 雅 兄御内拆

四四 木梨信一宛書翰

明治三年五月十三日

爾後先以

御清榮奉大賀候此節は御氣分如何に御坐候哉弟も只今薩より歸り申候付  
是は廿日頃には是非東行仕候心得に御坐候何卒老兄早々御出鴻奉待候廿  
二三日頃

(君上は毛利敬親)

老君上御發與之御治定に御坐候先は爲其取急草々頓首

五月十三日三字

鐵 面

(梨花は木梨信一)

梨花 老 兄御内拆

四五 伊勢華宛書翰

明治三年五月廿六日

亂筆高恕

(大隈は大隈重信)

彼二十萬金も大隈早々相運ひ吳頼越候返答も一々申越候何分にも返  
濟方之事は條約通りに無之は不相成候

爾後先以御清適奉大賀候此度

(老君上は毛利敬親)

老君上御東上に付弟も倍從仕候御國御改正事等も元より十分には相届兼  
候得共曾る粗御嘶仕候件々聊相運候事も有之申候乍去中々容易に無之旁  
に存外東歸も遷延仕候去月は

(君上は毛利元徳)

君上薩州へ御出被遊御供申上候彼藩も格別相變り候事も無之知人も多く  
は

(西郷は西郷隆盛)

朝廷上へ出只西郷一人に在國尤同人も久敷病氣に此節漸快氣仕候位之事  
に一向藩政へも關係不仕候九州邊も久留米豊後之小藩中今に方向不相  
定處も有之脱走ども、潜居仕候歟と被相疑申候四月初旬にも少々騒立候



得共直に鎮定に至り申候彼是二百人位は出國仕居候ものも有之時々外より煽動仕候氣味有之申候讃岐邊へ潜伏仕居候風聞有之先達を捕縛せものも被差遣未様子相分り不申何卒御帽轄地之處無御拔御詮議奉祈候先は一書爲其奉呈候其中時下御自玉第一に奉存候草々頓首拜

五月廿六日

尙々御留守にも皆様御無事之御様子北堂君には於山口拜顔仕候至御堅固に御座候拜

(小湊は伊勢華)

小湊 老 臺御直拆

松菊生

四六 檳村正直宛書翰

明治三年五月廿六日

爾後彌御清剛に御盡力大賀此事に御座候此度

(老君上は毛利敬親)

老君上御東上に付倍從仕候弟も東行仕候御國は廿日に立出いたし候得共蒸氣機管相損し漸廿四日夕神戸へ着艦仕候右之仕合に付鳥渡上坂いた

し候へ共無余儀直に又引取廿八日之飛脚船に

老君上御供仕候都合に御座候誠に俄急之事に上京も不得仕甚残念に奉存候且先達は朶雲御投與拜見仕候如貴論無心之もの而已上京仕居候も却る邪魔と相成まさか之節之用にも不相立兎角人撰等も不當之事而已不少候に付御書翰之趣を以得と相論じ置申候且又書物御願仕御送り方被成下慥に落手仕候御多事央御手数之程幾應にも恐入申候何卒代價之處も幸便被仰越被下候様偏に御願仕候御國も先頃日相變り候事無之御改正事等も少々は相運申候得ども前途中々容易に無御座候脱卒ども未二百人位は相知れ不申此期を外し候は、また逐々京攝間へも立入可申乍此上御配慮是祈候先は御見舞旁一書相呈候其中時下御自愛第一に奉存候草々頓首

五月廿六

鐵面生

(十八眞は檳村正直)

十八 眞老兄御直披

木戸孝元文書卷十 (明治三年五月)

六十一



四七 平岡通義宛書翰

明治三年六月五日

朶雲奉拜誦候彌以御清剛に引つゝき御盡力奉大賀候過日は御供中に取  
紛失敬申上候弟も緩々拜話相願候心得に御座候へども昨今取紛失敬申上  
候明朝は別に一向差問候事無御座候然し晝頃過にも相成候は、少々相約  
し置候事も御座候に付如何哉と奉存候實に馬一條に付候は別々預御高  
配御多務之央何とも奉恐入候先は取込居眞之御答まで草々頓首拜復

六月五日

木

拜復

先生

(此の書の宛名は先生とのみありて未だ詳ならざるも  
明治三年六月五日平岡通義に贈りしものなるが如し)

四八 森寺常德宛書翰

明治三年六月十日

亂筆高恕

(廣澤は廣  
澤兵助)

彌御清榮奉賀候さて過日は度々御光來奉多謝候于時心事逐々吐露申出候  
得共一向徹上不仕而已ならず外よりは外内よりはまた廣澤始種々に被相  
迫實に折惡敷處々出浮困却苦心此事に御座候不得止有名無實奉恐入候得  
共一應奉職可仕今日廣澤一同參

朝之都合いたし申候付は度々申上置候適當分之處は日々參

朝も出來かね申候間御許容被仰付度且又宿志通り年月を不移只今之地に  
退轉被仰付候様御約束通り今日より奉願置候此段乍憚得と被仰上置被下  
候様奉願候先は過日之御挨拶且は御願仕置度旁奉呈亂筆候草々頓首

六月十日

木

戸

(森寺は森  
寺常德)

森寺様御直披

四九 伊藤博文宛書翰

明治三年六月十三日

亂筆高恕

木戸孝允文書卷十 (明治三年六月)



(大隈は大隈重信)  
(井上は井上馨)

彌御清榮奉賀候さては馬車之義定る大隈氏之望も可有之と相考へ差扣へ居候處頓に井上氏掠奪之由甚失望仕候今一車之處は如何相成申候哉尤高價之品に御座候へは中々弟之力にも及び兼申候へども如御承知弟所持之分も至極之破れ物に在り今暫しか被用不申候に付兎に角何分之義承り置申度候其中浪華へ御越に相成候得ば暫時拜借は相かなひ不申哉此段鳥渡申上申上試候草々頓首

六月十三日

允

(芳梅は伊藤博文)

芳梅 様御直

五〇 伊藤博文宛書翰

明治三年六月十五日

昨日御頼仕置候一條如何之御都合に御座候哉何卒一御盡力被下弟輩に在り相濟候事件に御座候は、此好機會に六十之學問仕度相失し候ときは再び生涯中に不可得事と奉存候弟も元來今日支那朝鮮之御用而已に在り奉職仕

(吉井は吉井友實)

候處支那も今日之形勢に在り直ちに罷越候様にも相成間敷朝鮮之事は余程御根本に御見捨据相立候上ならでは着手いたし候事も萬々六つヶ敷一先此行を是非々々相途度十分に吉井へ御論破實事盡力仕候様偏御高配奉願候先は爲其草々頓首

六月十五日

允

(芳梅は伊藤博文)

芳梅 老兄御密拆

五一 門脇重綾宛書翰

明治三年六月十五日

拜啓先以御清適奉大賀候過日は朶雲御投與脱本之書面御示難有奉謝候いづれ拜趨御禮をも可申上と奉存候處一日々々と不圖取紛遷延仕失敬申上候其中拜青申上候心得に御座候得ども余り延引仕候事に付一應御答旁得貴得申候草々頓首拜

六月十五日

木戸



(門脇は門脇重義)

木戸孝元文書卷十 (明治三年六月)

門脇先生

六十六

五二 廣澤兵助宛書翰

明治三年六月十七日

昨日は雨中に御疲被爲成候半と奉察上候今夕は何卒御光來奉待候さては過日粗御約束<sup>嘶</sup>仕置候洋行之一條其説出來仕候は是非御盡力奉願候如御承知北京行も九月に至り候は水海に所詮渡海六つヶ敷然る處此節各國之奮激に<sup>は</sup>一兩月之間は元より使節引受け處にも無之付<sup>は</sup>先手明之次第に付此際此機會に罷越度大久保など違論も難計候へとも元々當秋は支那行之都合位に付程よく御説論其節は奉願候先は爲其奉願度草々頓首拜

(大久保は大久保利通)

六月十七日

允

(障岳は廣澤兵助)

障岳老兄御内密

五三 伊藤博文宛書翰

明治三年六月十七日

亂筆御推讀奉願候

(山尾は山尾庸三)  
(岩卿は岩倉具視)  
(條公は三條實美)  
(後藤は後藤象二郎)

先以御清榮奉賀候昨日は御答書拜見仕候山尾も折柄罷越候に付御示諭之邊も何となく相談し其より岩卿へも出また今朝も罷越候間委細承り候處別に議論も無之定<sup>る</sup>逐々御運之事と奉存候とふ歟楮幣紙中へ西洋文字御ぬき込み相成候歟との説有之元より左様之事可有之様も無御坐候得ども可成丈け人意に向き候様之御趣向可然と奉存候昨日は條公へも出候に付段々今日之事態御尋も御坐候間心事十分陳述仕候過日後藤よりもちらと承り候處實に民部大藏之惡口不一形宇内之大勢如此相迫り居候折柄かくまでも世間之不相開事は可浩歎之至に於政府も前途を大事と被思食候へは益御奮激固陋を御打摧き無之<sup>は</sup>不相濟候處却<sup>る</sup>其固陋之機嫌而已御窺被成候様に<sup>は</sup>他年滅亡は申までも無之累卵之勢に付今日に屹度御願慮不被爲遊<sup>る</sup>は眞以御大事と奉存候邊も言上仕尙是非々々昨年來も建

木戸孝元文書卷十 (明治三年六月)

六十七



(大隈は大隈重信)

(林は林友幸)

(大久保は大久保通吉井友實)

(芳梅は伊藤博文)

言仕候通大隈を参議にいたし民部大藏之處を重々引受け左候諸省之弊も相改め可與之權を與へ不可讓之權を保ち各其宜を得候ときは隨之目的も相立漸々實事も可相舉と奉存候に付先其邊を必至に相盡し置申候○洋行之一條も林山尾などより承り候得ばどふ歟都合もよろしき歟に被相窺申候廣澤にも相論し候處其事何れよりにても相發し出候は、精々盡力可致と申居候弟はどふで支那行の都合に於七月頃よりはいつれ之道外出仕候次第に御坐候間に議論之有様も無御坐候得ども大久保之處如何歟と甚懸念仕候此邊吉井どもより自然違論出來候節は説破之都合に御配慮奉願候乍此上精々御盡力奉仰候先は爲其奉呈候草々頓首

六月十七日

允

芳梅 兄御内披

五四 伊藤博文宛書翰

明治三年六月十七日

(廣澤は廣澤兵助)

(大隈は大隈重信)

(大久保は大久保利通)

(林は林友幸)

(参は参議任官の事) (副は副島種臣)

(芳梅は伊藤博文)

度々御答書御示拜見仕候然る處彼一條も百方盡力仕見候處終に今日廣澤より如別紙返答有之勢も力も落申候大隈へも御相談有之候と申事に御坐候間御承知と奉存候以來よろしき嘶はきかぬがましにて御坐候大久も内實之論は如何歟難計林書狀上之譯に於も有之間敷黒副は始終違論而已故各國之不平不容易なども彼が口より論出し候事と存申候参議元より最前百方固辭たし抜け今日之行が、りと相成候へども宿志被果候へは元より何に於も不苦元來参之字もいやのいやに御坐候副等にいづれむし殺に逢ひ候覺悟に無之、は手も足も動し候と思ひ、<sup>(不明)</sup>片刻も難被堪奉存候決局相分り候事に付是まで之御都合も有之一應申上候草々頓首

六月十七日

允

芳梅 兄御内披

五五 福羽美靜宛書翰

明治三年六月十七日

木戸孝允文書卷十 (明治三年六月)

六十九



朶雲 奉 拜誦候先以

御清適奉大賀候一昨日は於

宮カ □中折角拜青可仕と奉存居取紛終に失敬申上候被仰置候一條甚鏡面皮之至に御坐候へとも相認持參可仕と奉存是又不圖及遷延奉恐入候早速差出候様可仕候今晚刻は別に用事も無之様に奉存候乍去態と御光來被下候は恐入申候いづれ是より參趨可仕候先は御請まで草々頓首奉復

六月十七日

福羽先生

木戸

拜復

(福羽は福羽美辭)

五六 林友幸宛書翰

明治三年六月十七日

亂筆御推讀可被下候

(山尾は山尾庸三)  
(岩卿は岩倉具視)

彌御清榮奉賀候さては昨夜粗御嘶申候一條今朝山尾も罷越い曲貴兄より岩卿へ御嘶有之候事に付最早徹底いたし候事と相考へ候に付是非御奮發

(廣澤は廣澤兵助)  
(大久保は大久保利通)

に御洋行被成候様にと相促し候事に付弟は元より所願に御沙汰有之候得は速に遵奉仕候と申答候次第に昨夜貴兄より御噂之邊も相語り申候一體之事に付候も爲前途是非罷越候方可然次第山尾も懇切に申出候に付尙山尾どもとの相論じ候邊を以も厚く岩卿へ被仰入何卒迅速に相運候様御配慮奉願候過日細廣澤へも相談し見候處其説相發し候上は精々盡力も可仕と申居候大久保違論出來候歟と懸念仕候是もどぞ御功夫を以御打摧き且は廣澤よりも説破いたし候都合に御配慮奉願候たとへは洋行不仕とも當七月よりは支那へ罷越候都合之處支那も此節之擾動に所詮兩三月には片付申間敷左候へは洋行いたし候とも別に差問候譯も無之大久保も違論相生じ候譯も無之候へども萬一違論之處難被計吳々も可然御盡力岩卿よりもい細御吞込に御措置之邊只々奉祈候先は爲其草々頓首

六月十七日

木戸孝元文書卷十 (明治三年六月)



(吉井は吉井友實)

尙々吉井なども都合より事により候は、御説破大久之故障出来仕らぬ様奉願候拜

(林は林友幸)

林 契 兄御内密

木 允

五七 佐々木高行宛書翰

明治三年六月十八日

先以御清適奉大賀候さては今日老公様御光臨被爲在候候故自然御閑暇に御坐候は、御光來奉待候爲其鳥渡相窺申候草々頓首拜

六月十八日

允

(佐々木は佐々木高行)

佐々木先生

五八 伊藤博文宛書翰

明治三年六月廿二日

朱髯公之大像思食之邊 老公へ申上自然御望に候は、取りに差出し可申候○支那行に付條約等取調之相手昨日御嘶有之澁川と歎何と歎申候

(老公は毛利敬親)  
(澁川は澁川敬典カ)

人暫時借用相成都合御配慮奉願候今日御閑隙御坐候は、御光來如何  
朶雲拜誦昨日は登堂御妨仕候早晚蒙御馳走奉謝候書類返上及遷延却る煩御使恐入申候他日今一應拜見仕度奉存候且又明日より横濱へ御出浮直に浪花へ御越之由何歎御多事と奉察候明朝御早發に無之候得は是非登門いたし度と奉存候今日は老公も御出被爲在候得ども一向故障無之自然御手隙に候は、御光來奉待候先は爲其草々頓首拜復

六月廿二日

(井上は井上馨山田は山田顯義)

尙々萬一違拜青候は、何卒迅速御歸京奉待候乍失敬井上山田等へも可然御致意奉願候爰元之軍務も随分如御承知議論たおれ故どふそ山田にも歸京盡力候は如何と御す、め被成候は如何

芳 梅 兄内拜復

松 菊 生

(芳梅は伊藤博文)

五九 福羽美靜宛書翰

明治三年六月廿五日



亂筆高恕

爾後彌

御清榮奉大賀候さては過日被仰開候題字之儀一應認見候得共余り鐵面皮  
之至に差出し候にも不堪赧顔如何可仕候哉と苦心仕居候處自然遷延に  
も至り奉恐入候間此儘一先入貴覽申候何卒可相成は別に他へ御命し被下  
度奉願候い曲拜趨之上可申上と奉存候處彼是取紛今日は御無沙汰申上候  
いつれ其中拜青可申上と奉存候草々頓首拜

六月廿五日

孝 允

福羽 先生拜呈

(福羽は福羽美静)

六〇 大久保利通宛書翰

明治三年六月廿七日

亂筆高恕

拜啓昨夕は登門御妨申上候上蒙御馳走奉萬謝候御願申上置候朝鮮一條等

之義可然御高案奉願候且又乍卒爾杞憂之餘心事無腹臆申上候邊不惡御聞  
濟奉願候あにて思食之程如何と甚痛案仕候尙御談話中小弟云々之御一  
言相窺候様覺申候處是は實に御不愆之譯と奉存候小弟之心事昨今申上置  
候義に亦も無之元より 老臺之驥尾に隨ひ候事は不願微力此節とても  
老臺方御在勤に候得は弟日々數度之服藥數度之銜藥相用なから支那行等  
之

命も蒙り奉り居申候間

御沙汰に隨ひ此御用を目的先奉職仕候仕合昨日之御尊等は元より不存寄  
次第に老臺之不被爲立地へすゝみ候義は寸斷之刑を蒙り候とも百世大  
不忠之名を受け候とも誓ふ一日も其席に安坐仕候事不致今更事新ら敷不  
申上候間御高察奉仰候○昨日粗御約束仕置候通一日御閑隙相窺御光來奉  
仰候尤炎熱中之事に御坐候間別地に一趣向を設け候もよろしく尙御差  
圖奉願候先は爲其草々頓首九拜



六月廿七日朝

尙々昨夕拜見仕候將軍之御一幅暫時拜借相叶候事に御坐候は、何卒奉願候此二帖格別不面白候得共備御一覽申候御留置に被成候不苦候敬白

(甲東は大久保利通)

甲東 盟 臺御内拆

允

六一 野村素介宛書翰

明治三年六月廿九日

甚暑之節先以御清榮に御奉職奉大賀候弟も無異且々消光仕候間乍憚御放慮奉願候支那行も天津に支那人ども暴發魯佛等之人男女數十人を殺害し歐洲人ども、殊の外大怒四方之軍艦等も逐々差向候勢に此後落著如何可相成哉兎に角右之次第に使節處にても無之實に今少し御地に御同遊仕候へはよろしくと甚残念に奉存候爾他相變り候事も無之都下之近況も随分不面白候過日は朶雲御投與難有奉存候明日御飛脚相立候由に

寸暇無之眞之一筆奉捧呈候今年は炎熱は實に甚敷大抵大困迫に御坐候御地如何分時下御自玉爲邦家第一に奉存候草々頓首

六月廿九日夜

尙々右之仕合に諸彦へも書狀得出し不申候乍失敬柏邨宍戸久保小幡大津寺内翁へ可然御致意奉願候拜

□ 邨 老 兄 御直披

松 菊

(此書の宛名一字闕くも野村素介に贈れるものなり)

(柏邨は柏村數馬宍戸久保小幡大津寺内翁へも書狀得出し不申候乍失敬柏邨宍戸久保小幡大津寺内翁へ可然御致意奉願候拜)

六二 伊藤博文宛書翰

明治三年七月二日

大亂筆御推讀御火中可被下候

今日之次第御心得までに大略申上候必々世外兄之外他へは誓ふ弟より申越候邊は御嘶御無用と奉存候此度之事に驚き申候且廣などの事も有之候に付御國之人にも輕々御言無之様奉祈候御國之事漸相濟上京い

(世外は井上馨)



たし候へはまた如此惡醜境へ落込薄命之至に御坐候

爾後彌御清榮奉大賀候さては廿三日御別れ申弟も不快に外出も不得仕

(條公は三條實美)

廿六日朝無余義事に押る條公へ罷出候處余程御苦心之趣有之候哉に被

(岩卿は岩倉具視)

相窺候に付御尋申上候處廿二日參議連一同岩卿へ罷出條徳二公も御揃を

(徳公は徳大寺實則)

願ひ參議一同においては前途之處民部大藏之處此儘に決る目的更に

無之乍去大隈始必目途も可有之事に付同人等を參議に御採用相成候は

五年之事は三年にても相運可申當參議一同之處は是非退職被仰付候様に

と切迫に申出候由に其元因一朝一夕之事に無之此等之始末粗承知仕居

候得は是非廿三日に御とめ可申之處夢にも存不申驚愕痛歎之至諸省中

にても如此惡弊相生し候は實に不宜候處政府上に連署朋黨を醸し候様

之事を出來候は必竟 皇國之大不幸と切齒仕候仕合其起る處を相察し

候に大隈を政府へすめ候處第一に副大に相抗し大は又副と相合し居候

事に付始より副に被欺條公岩公より登庸之事御催促御坐候も始終不折

(大隈は大隈重信)  
(副は副島種臣)

(廣は廣澤兵助)

合口に殊に又驚歎いたし候は廣此度之一條へ大に荷擔いたし平生副等

之事も存居候處民部論に付候る相合し候事と被察條公も廣甚強くなど

御嘶も有之申候佐は元來大隈もすめ候處全籠絡せられ術中に陥り候様

(佐は佐々木高行)

被思申候諸氏真にすめ候次第に候得は必すめ候計らひ可有之候處如

此致し方にては全彼を相退け候企にも相當り候譯に初發より一向弟に

は何事も不相洩尤引籠中之事に御坐候へ共どこまで其譯と被相察申候其

次第にても大隈も一人登庸に相成候とも所詮いたし方も無之次第にても弟

も痛歎之余大久へも罷越前途之事を押し何となく今日之次第に及ぼし大

(大久は大久保利通)

に及議論候得ども一同固結之趣に被相察大隈等始政府に御し候目的無

之不得止申出候事に付是非退職と申處を申強り弟も甚遺憾至極は廣之一

條も有之赧顔に不堪爲其大隈へも不忍對話かゝる困却苦痛は無之候條公

方へも實に奉恐入候次第に御氣之毒に奉存候へども如何とも難致に付

斷然大隈どもを御用ひ被成候歎又は參議を是非御とめ被成候歎思食之



決着仕候處を以判然被仰出度と屢々御力を添へ候處此度之一條段々枝葉にも關係有之候由に容易御決斷御六つヶ敷度々參議等も罷越御催促申上終におかしき事に相成民大を相分ち候と歟申事に至り岩公より大隈へも御談有之候と歟弟は其席に加り居不申候故如何なる都合歟と存大隈へ面會に於今日其旨趣承り候積りに御坐候四方八方實に油斷ならず大に兄なども人を信じ居候被欺候事有之候と被相察候事も有之申候此度之一條に弟も大に其心當り御坐候乍此上御用心第一と奉存候廿日之日弟は中程より承り候處渡邊など奥州より歸り情實切迫に申出且大隈も前途之事を逐一論述いたし却る其を異に引受け大隈之登庸も迫り居旁に俄に廿二日に相發し候事歟とも考へ申候然し是は弟の邪推に御坐候何卒御用早々御片付速に御歸京御待申候人情可惡之情實中々筆頭に難盡此度之もつれも中々不容易行かゞり驚愕浩歎不知所出候松方なども大に民大之處致を不同意申事も有之申候彼は民政もとゞき候趣に評判よろしき人

(渡邊は渡邊清力)

故彼などの申事は益世間へ之響強く有之申候大略得貴意申候草々頓首

七月二日

(此書宛名及び署名を闕く明治三年木戸孝九が伊藤博文に贈れるものなり)

### 六三 大久保利通宛書翰

明治三年七月四日

亂筆高恕

(廣澤は廣澤兵助)

(大隈は大隈重信)

過日も申上候通廣澤之少しにても關係仕候は甚不宜此邊は申上るまでも無御坐候得とも御合置奉願候以上

拜啓先以 御清榮奉大賀候過日は態々御光來奉萬謝候さて昨日大隈へ面會仕候處元より今日之事否不平を鳴らし候と申譯は少しも無之由に御坐候得共一體之旨趣は昨年來時々具に言上仕凡前途之目的を立一時之誹謗を不顧只管永遠之事を謀り盡力いたし候心得に御坐候處至今日之事此廉とて之緩急と申事も不得窺候仕合に付全緩急之事而已之相違にても有之



間敷歎黜陟之權は元より政府に有之候事に付たとへ御さとし無之とも如何様之地へ被投候とも只 命是奉るの外處存無之乍去かゝる嫌疑之折柄に候得は却る大藏省之邊も被免候得は無此上於私は難有仕合に御坐候得とも此際強る歎願仕候も不平ケ間敷相響候は實以奉恐入候義に付差控へ罷在候然し昨年來元より凡其略をも相定め進歩仕候處賈金と不作との大患に不如意之事不少千苦萬辛仕當年之季よりは是等之處も稍被補候様相考候處至于此隨分遺憾之譯に候なと申居尤前途之處も一入政府上において御入はまりに相成候得は無此上と此邊は隨分相願居候様子に不付るは是非とも乍御苦勞先生に傍ら御任し被成遣候様奉願度と誠心以吐露仕候今日之次第に至り候邊も定る不得止御行かゝりも被爲在候事と奉存候此後之處益御大事に付必竟至于此候譯に御坐候間此上は何卒先生に御引受け被爲在候得は自然と一和之運ひにも至り別る御都合可然と奉存候於弟等も乍陰力之及ひ候丈けは精々盡力可仕候同人も此處は聊無隔

意相願候様子に不只管前途を氣遣候様に相考申候今日參上仕候可申上と奉存無余義終に外出不得仕候いつれ拜青ならては巨細之情實難盡申上奉存候へとも一應書中を以申上候前申上候様先生には必無御辭退御任被爲成候處於弟も邦家之爲め千禱萬祈之至に奉存候草々頓首拜

七月四日夜

尙々過日申上候通齒齲病に付候は昨今尤困り申候頑症に不所詮療治之目途も無御座候へとも捨置候は益腐爛候様成行實に苦み申候此儘隨意に加療仕候も心中實以難安奉存候間當分にも御了簡被仰付度奉存明日歎願仕候心得に御坐候間宜御合置奉願候其中委細は拜青可申上候敬白

甲 東 老 臺御内拆

允

(甲東は大久保利通)

六四 大隈重信宛書翰

明治三年七月八日

木戸孝九文書卷十 (明治三年七月)



亂筆高恕

拜啓先以

(大木は大木喬任)

(大久は大久保利通)

(鹿島は鹿島庄右衛門)

御清適奉大賀候一昨日は難有奉存候さては昨日大木君にも御面會仕過日來之情實逐一御嘶仕候處大略は已に御承知に爲天下只々大浩歎之至に御座候付は大久論大木君よりも強被申立候方可然と奉存愚存之ま御談申置候左候へは不聞ことも耳に入不見ことも目に觸れ必覺悟に至り候事も可有之と存申候向い細は拜青可申上候于時一昨日粗御嘶仕置候次第に付鹿嶋なるもの差出申候間い曲御聽取可被遣候彼も上海行之念も御座候間自然何歎御用端に相成候事も御座候は、御遣可被成候先は爲其鳥渡申上候草々頓首拜

七月八日

木戸

(大隈は大隈重信)

大隈 先生御内拆

六五 大木喬任宛書翰

明治三年七月八日

亂筆高恕

拜啓昨日は御妨申上候上種々蒙御馳走奉萬謝候此節之一條先生にも御浩歎之至前途を想察仕候は實に不堪杞憂候事實粗申上候通之次第に付政府より大久翁之民部にも係り候様達被仰立候は如何哉と奉存候左候へは大久翁も不聞事も耳に入不見事も目に觸れ今日までと違ひ現事に當り候は、大に覺悟いたし候事も可有之と愚考仕候然る上は國家之幸に大隈君など之盡せしことも相分り可申何分政府上に始終人に惑わされ候様に必要竟基之相立候と申目的は無御座候尙又拜青之上可申上候得ども再應愚考仕大久翁之處は其御都合可然歎と奉存不取敢申上試候先は爲其奉呈候草々頓首九拜

(大隈は大隈重信)

(大久は大久保利通)

七月八日

尙々此品乍輕少呈上仕候御一笑を玉わり候得は無此上奉存候敬白



(大木は大木喬任)

大木 先生御内拆

木 戸

六六 渡邊伊兵衛兼重讓藏宛書翰

明治三年七月十二日

今日退

朝懸け參

殿仕候様御沙汰之趣い曲奉畏候然處一兩日前より不快に於屢參

朝之御達御坐候へども御斷申出候様之仕合甚以奉恐入候得共今日之處

御了簡相叶候儀に御坐候は、可然御執成<sup>之</sup>程偏に奉願候先は爲其草々頓

首拜復

七月十二日

尙々御口上にて御一答奉願候以上

渡邊 様

兼重 様御直拆

木 戸

(渡邊は渡邊伊兵衛兼重讓藏)

六七 伊藤博文宛短信

明治三年七月十六日

柳原來訪に付大久保へ同行いたし申候頓首

十六日

伊藤 殿

木 戸

(柳原は柳原前光)  
(大久保は大久保利通)  
(伊藤は伊藤博文)

六八 黒田清隆宛書翰

明治三年七月十七日

先以 御壯榮奉大賀候過日は失敬申上候彌北地へ御發しはいつ頃に御決定被成候哉御折を窺ひ其已前に今一應拜青申上度奉存候于時舊藩之者に於山尾庸三と申候もの會る英國へ罷越居近頃横須賀之方に出張仕候造艦材木等之事に付蝦夷之材木等も詮議仕度由申居候間折角先生に彼地方へ御出張に相成候事に御坐候間窺置候方可然と申談置候自然參上仕候は、御面會被成遣度弟よりも奉願候十年前には黒龍江へも浜り申候乍然當時



とは余程事變り居可申に付御承知に可相成事も有之間敷と奉存候得共大  
様之邊任御尋可申上候先は爲其草々頓首拜

七月十七日

木戸

(黒田は黒  
田清隆)

黒田先生御内拆

六九 廣澤兵助宛書翰 明治三年七月十八日

亂筆高恕

七月十八日

昨宵は御同行仕意外之大醉大失敬申上候萬御容赦奉願候縷々御深話拜聽  
實に感服奉り候弟も只々御同様に其處之情實に苦慮痛心仕世間之人に對  
し候も何となくかたせまく相成只管時勢之不至事歎と浩歎仕居候處御  
心事相窺又御同様に御奉公之時と奉存候間乍不及御意味推了仕一書相認  
見可申候い細は其上拜青に御相談可仕候今朝參

(障岳は廣  
澤兵助)

朝之事申來り居候處可相成儀に御坐候は、何卒老兄御聞置奉願候誠に不  
敬之段奉恐入候先は御願旁草々頓首九拜

障岳大兄御内拆

松菊

七〇 大木喬任宛書翰 明治三年七月廿三日

亂筆高恕

先以

御壯榮奉大賀候さては同國之ものゝ山尾庸三と申候もの當時御省中之  
製銃場へ出勤仕居過日來出京場中前途之事も種々苦慮仕どふ歎一應御免  
をも奉願度志願之由に屢預議論候得ども如御存弟も一向不案内故如何  
とも差圖難仕兎に角

先生へ拜謁仕候も相窺候様申聞け則今日參上仕度段申出候間自然御手隙  
に被爲在候は、拜謁被仰付候様奉願候決る暴論は不仕今日之事も甚苦憂



仕居申候先は爲其草々頓首拜

七月廿三日

木戸

(大木は大木喬任)

大木先生御直拆

七一 廣澤兵助宛書翰

明治三年七月廿五日

(條公は三條實美)

彌御清安奉大賀候さて昨日條公に相謁し候處老臺御辭表と歎被差出候由に御尋被爲在候に付兼承知仕候至公之御趣意當り前言上仕候處尤千萬に御座候得共府縣之始末廣澤にならてはと申處より同人へ被命合併論に付候は永世へ相係り國礎を維持致し候處之利害を推窮いたし候處より起り候事に府縣之きまりは一片付いたし候までは同人へ任し候事に同人も最初御受け仕候事と相考候に付此段御直に得と御嘶仕候様にと被仰付今朝早速參上可仕之處大亂髮故一應書中を以申上置候其も今十二字後御參朝被爲成候様との御傳意も被爲在候間不取敢申上候且又是は

(廣澤は廣澤兵助)

只々弟之考而已に失敬至極に御座候得共思之儘形容之儘申上候御容赦可被成下候此度合併論之處傍聴仕候に先途に係り候事に御座候へ共九に民部官にも他人へは不被相談只廣澤無他之主意故廣澤へ而已機宜をはかり候外無之左すれば自然當前に落合可申などと只老兄を目的に仕候様に被相察候處元より其辭表は此度之事に不相係候得共時機におゐて残念と奉存候事も有之緩急は定る思食も可被爲在候得共何も無服臆申上候御了簡可被下候余は拜青と申縮候勿々頓首拜

廿五日

允

(障岳は廣澤兵助)

障岳老兄

七二 伊藤博文宛書翰

明治三年七月廿八日

(續二郎は  
大黒屋續二  
郎)

亂筆高恕續二郎違約不埒至極に付乍御手数數御出港之上は早々御催促

奉願候

木戸孝九文書卷十 (明治三年七月)

九十一



(大隈は大隈重信)

過刻は御光來春多謝候今晚參上可仕と奉存候處引つゝき客來十口之中及遅刻候間乍残念御無沙汰申上候さては縷々申陳候一條尙得と大隈氏と御談話御熟味可被下候然る上は弟も其合を以其當りくは今一鞭相加へ見度此處大に彼我之差別有之終に前途之形行にも關係いたし候間卒然口外仕候も旨趣貫徹不致實に意味有之候事と相考へ申候何分之義御一答可被下候○遠藤氏は歸港は相成不申哉正二郎入費之邊も一應拂きり爾後座右之玩物始一切勝手にしみつ方におゐて買得不致候様仕度西風東風に無益之事不少候甚御手数之義奉恐入候得ども此度御出港之折に御拂替置被下候得は別難有御歸京次第直様返上可仕候御多事中不遠慮至極に御坐候へとも速に一始末相つけ置不申は氣にかゝり申候其故遠藤へも度々相頼煩多事中申候先は爲其草々頓首

(遠藤は遠藤謹助)  
(正二郎は木戸正次郎)

七月廿八日

尙々別包百金爲御馬代差出申候御落手可被下候○今朝御嘶之形行一通

(芳梅は伊藤博文)

芳梅 兄御内拆

松菊生

御認被下候得は都合有之候に付乍御面倒御出港前御認置に相成候へは無此上と奉存候以上

七三 大橋慎三宛書翰

明治三年七月三十日

亂筆高恕

昨日は客來に取紛御答も不申上候拜

(山中は山中猷)

昨日は朶雲御投與奉拜見山中翁より之一符慎に落手仕候御示諭之趣尙奉畏候さて又弟洋行と申一條何歟御不審之思食も有之候様烏渡御書面上に奉窺候處決り子細有之候儀に無御座い曲は過日逐一面上に申上候通に御坐候間偏に御降慮奉願候尤逐々御聞及も可被爲在當時西洋之形勢一變轉之折柄に此後之模様により忽我神州之關係にも相成り候は不待言今日までも天下之事必竟大難に涉り候



儀盡く海外に相係り候行がゝりに此余之處益彼我之情勢を盡窮不仕  
は着手之手段も確乎相立がたき事も可有之隨ふ自然時勢に相反し候様成  
行候ふは

國威御光輝之日も難期と只々奉存候付るは此際一應暫時にても渡海仕見  
度と平生之念願頻に發起仕候事に御坐候一書生と申候は官員に罷越  
候へば何歟廉立候用向にても無之る彼地へ渡海仕候は却る面倒之儀も  
不少其情實を盡し候事も難相成由に付一書生と申都合に御坐候へば大に  
便利を得候に明に其次第吐露内々申立候様之譯に御坐候實に是等に  
又兎や角と煩貴慮候ふは幾應にも痛却仕候何卒此邊之義は偏に御了解を  
玉わり候様奉祈候先は爲其草々頓首拜復

七月三十日

木戸

(大橋は大橋三)

大橋先生内密拜復

七四 久保斷三宛書翰

明治三年八月七日

亂筆高怨

(柏は柏村  
數馬は尖  
戸磯杉は杉  
孫七郎)

縷々柏尖翁杉兄などへも申越度と奉存候得共飛脚切迫に付巨細に不  
申越候間御序に可然御致意奉願候

過日は朶雲御投與難有拜誦仕候先以御壯榮に御奉職奉大賀候さては東京  
も別に相變り候事も無御座乍去前途之勢を想察仕候ふは一々煩念至極當  
時佛普大爭戰此決局何れ歟一大強勢に至り可申其末は我  
皇國へ關係仕候事も必可有之佛之宗旨を出張するが如き普之亞細亞に屬  
地を希望する如き可恐事而已に御座候歐人之説にも魯普之進略之志は  
益盛なりと申候此戰爭之末差向支那は和となり候とも戰となり候とも一  
大艱難を受け可申不遠長崎へは歐洲より之傳信印度香港上海を経候る相  
達し横濱へは米より相通し候都合に御座候實に小成に安し油斷仕候ふは  
從來之勤王と申候ものも御一新と歟申候ものも必水泡に至り可申候爾他



申上度儀も御座候へども御飛脚甚切迫に付眞之一筆奉呈候其中時下御自  
愛爲邦家第一と奉存候草々頓首

八月七日

尙々別二帙入貴覽申候脱隊之もの三田尻船木等にも亂暴仕候由實に可  
惡之至に御座候御疎不被爲在御事と奉存候得共九州四國邊は不絶無御  
油斷御探索御取締有之度無左は始終御手煩之絶は無御座其上世上へ  
之外聞も甚いかゝに相響き申候且又四國邊攘夷説頻々被相行候歟之様  
子是等も速に其元因へ御着手無之は關係之様子により候は實に支  
那之覆轍とも相成申候折角

老公

釐下へ御詰も被爲遊候御事に付御探索之上是等は早速御注進尙  
朝廷へも被仰上候様に被爲在度御事と奉存候先は其爲取急頓首

(久保は久保三)

久保 大兄御直拆

木 圭

七五 三條實美宛書翰

明治三年八月十一日

謹啓先以

御清雅可被爲涉奉恐賀候過日は尊書を玉わり奉敬誦候引つゝき不容易被  
爲在御配慮實に恐入候次第に御座候今日之弊世上なり官員なり議論多端  
之害難免何卒各議論を滅却し盡其職務候方却る其功可有之と同志之もの  
へは忠告仕候且又孝允身上之儀野村素介へい曲吐露仕置申候間乍恐御聽  
取を玉わり宜奉願上候縣内も近來靜謐異情無御座候春來紛紜之決局も已  
に着手仕候士人之日に増困迫仕候には甚當惑仕候先は一應之御答申上度  
奉捧呈候時下別

八月十一日

孝 允敬白

大臣公閣下

(大臣は右大臣三條實美)

木戸孝允文書卷十 (明治三年八月)

九十七



七六 品川彌二郎宛書翰

明治三年八月十五日

昨日は御光來奉謝候承り候得は今日は彌洋行御奉

(河部は河村純義)

命之御様子重疊之御事と奉存候さて粗傳承仕候へは兵部省河部之嘶に別に一人字佛二國へ御使被差越候方可然との建言も有之どふ歟弟之噂も仕候歟之様子何卒今日之機會に相遂られ候事に御座候へは無此上仕合どふそ一御盡力被成下河部等へ可然御周旋之御都合は出來申間敷哉可相成事に御座候は、偏に御高配奉依頼候爲其草々頓首

八月十五日

鐵面生

(扇州は品川彌二郎)

扇洲 盟 兄御内披

七七 岩倉具視宛書翰

明治三年八月十六日

大亂毫御高恕奉仰候敬白

(寺島は寺島宗則)

尊書奉謹誦候昨日は御神事中登館御妨申上候折角今日は寺島方へも罷越可申歟と奉存居候處夜來持病相起于今外出不得仕態と御示之程萬奉恐縮候昨日粗奉言上置候一條は實に御許容奉願上候天下之事は十年を御期し被爲<sup>在</sup>游漸を以大に御誘導被爲遊候様只々奉祈上候乍去一旦御決定に至り候事は百紛雖有之毫も御動搖不被爲在最初御決定に至り候節細微に御評議等被爲盡度奉存候猥りに國家之秘事は人に語られ不申朝堂におゐて機宜御料理之場合も御座候得ども或は刑法にかゝり候事は刑法大藏にかゝり候事は大藏へ先以御評論政府之獨權を以御所致に相成候様には却る政府之御威權も不相立と奉存候分省等之事にもたとへは諸省之少輔已上等へは御評議も被爲在知縣事等之論も有之候得は公然と被爲召於皇居精議を盡し得失を論し候等之上に御所致被爲在候得は實に公明正大に天下議論之出様も無御座後來之處白駒之馳せ候様にはとては參り不申候得ども進みたる路をあともどり之不仕様には實に御誠力を被爲盡



度左候も昨日も申上候通天下一般へ御眼をくばらせられ漸々開化に趣き候様御着手月を逐ひ日を逐ひ民之束縛をとき自由を得させ候様に御手段有之候ときは誓ひ下より開化に馳せ左ほど御苦心無之候も御運之御事と奉存候ものは只あともどり之仕候が大に人之方向を亂り皆々迷惑いたし申候今日之處は幾應にも先  
朝廷八百萬石之處に基本と被爲思食諸藩は終に是に隨伏歸一仕候様御定算萬全之儀と奉存候任御答奉呈亂毫候頓首奉復

中秋後一日

孝 允

(岩倉公は  
岩倉具視)

岩倉公閣下内奉復

七八 伊藤博文宛書翰

明治三年八月十七日

大亂筆得と御推讀奉願候

(大隈は大隈重信)

朶雲拜見仕候大隈御登庸之邊も過日御嘶申候通御決定に至り爲邦家之重

(岩條卿は  
岩倉具視三  
條實美)

疊之事に御坐候得ども是も必竟前途を維持可仕との一念に付此上紛紜之議論相起り候様に於ては實以無益至極之事に候間是非同氏におゐても前以岩條卿始へ將來之目的十分論定相成置候義は至當之事と奉存候毎々愚論申陳候通今日之 朝廷諸官員當其任候人としては甚稀少皆多くは姑息に於て則賣藥之萬能藥と同様に於何之病氣にも用られ申候然し毒には相成候とも其益は甚少く其中に於成丈け毒に不相成様にと用ひ候まで之事に於此形に於幾數年相過候もは滅亡之外致し方無之付るは此際におゐては大隈如きは可相成丈け相助け候も當其任候事至急と存申候乍去また萬能藥は自ら其毒と相成候も益と不相成も一向知り不申世間四方は病症も知らず萬能藥之毒と成か益と成る歟知らざるもの而已に於藥も自ら藥づもり人も藥と申名を以藥づもりに於十に八九は安じ居候事に付十分適意之場に至り候と申事は甚六つヶ敷譯に御坐候得ども天下また其弊を知り候人も不少其ものは大隈などは是非相助け候も其任に當らせ度と而已存込候事



に付於大隈も此間之辛抱苦敷事と存候へとも是非盡力無之は不相成大隈之才也氣也義弘村正之如名劍候間其口を開を見其聲を不聞して恐避いたし候様之氣味御坐候此邊之處難申盡いづれ拜青愚意丈け可申述成丈於今日は精々前途之事御論定相成置度事と奉存候草々拜復

八月十七日

尙々御端書之邊は昨今種々之嘶も入耳苦情不少候思召之邊には所詮六つヶ敷敷是又拜青と申殘候以上

芳梅 兄内密拜復

干令

(芳梅は伊藤博文)

七九 三條實美宛書翰

明治三年八月廿日

奉亂毫奉恐入候尙  
尊書奉謹誦候昨日不顧不敬奉捧呈亂毫候處御多務之御央態々蒙御高諭難有奉感泣候謹<sub>御一覽を玉わり候は、乍恐御返投奉願候萬一參議中に承知仕疑惑を生じ仕候は却る</sub>當今内外之形情を想察仕候に如<sub>國家之御爲に不相成而已ならず不宣と奉存候敬白</sub>尊命實に不容易前途之目的不相定ときは

御一新も却る

皇國之危急を促し候事と奉存何卒於此機彌天下之大權歸

朝廷海内平均之力を以

國威海外に光輝する之基礎相立候様有之度と専ら版籍返上等之事よりして輕重大小を察し舊弊を洗除し速に日新開化之境に趣き度種々盡力多少之苦心仕候得どもまた人々其見異なるものあり是又不得止之勢とこゝに其一を擧げ申上候得は服心上より之治を不求して皮膚上之治を被爲急小仁小惠を施し一時愉安之姿におちいり天下狙恩侮上有功之藩も亦形狀を不慎

朝廷之威權却る舊日之如きにあらず名實甚異なるものあり然して是を今日に欲救は決然大斷之外無之決然大斷と申候へは誰歟一時之權を専らし事を萬世に期し死生之間に立懲惡舉善天下之耳目一動一新不仕は其詮無之雖然今日之勢におゐては此策甚難きものあり付るは如則今優柔自



重之外無之優柔自重と雖も亦後日之目途無之は彌天下亂離に可至十年十五年廿年を計り一定之略被爲定度愚意を以奉考候に此策に被爲出候得は先

朝廷八百萬石を以御獨立被爲遊暫諸藩之處は此儘に被成置大に府縣に御着手相成然して天下一般人民從來之束縛を解き各自由之權をとらせ朝廷之政自然と獨出仕候ときは終に諸藩も舊習を守る不能隨而朝廷へ附和仕候様可仕乍然兵部省之如きは尤大臣納言様方に屹度今日一定之目的を被爲立逐日實事之進歩仕候丈け之御定算は是非無之不相成且又人才御登庸に付候は才氣才力有之候ものは必諸省に限らず府縣とも一時大に人々之嫉妬を招き候事も可有之殊に今日之勢盡く舊弊舊習を一洗不仕は天下之御爲に相成候事少く又一洗仕候に付は常人之總る忌諱仕候事而已に付進退黜陟等はたとへ紛紜之説有之候とも政府限りにて輕易に御所致無之様被爲在度一旦人に事を任し其理害得失を公然不

相盡して容易に解き候様之事御座候は隨而人々之惑を生じ候而已に而後事之妨をを却る相離可申候生し候様相成申候凡今日之處を以基本と被爲遊爾後御搖動無之時は必十年十五年之後には屹度御實事も相舉り可申候乍恐今日萬難之御用御座候得ば決る辭避不仕乍然今日之事十年十五年を計り候得は一時如何様盡力奔走仕候とも其詮無之事と奉存候順序を被爲逐御目的有之候は御布令相成候事は決る容易に御變換無之様肝要至極に奉存候尙今日政府上自ら其人あり孝九等八九月之間出海外何其輕重に關係せん内願する所別に陳述仕候事無之何卒素願御許容被仰付候様奉歎願候誠恐々々頓首九拜

八月廿日

再敬白大隈奉

命未仕邊初奉畏候同人も前途之思食得と奉窺一貫之御旨趣了知仕候は、必拜

(大隈は大隈重信)



命仕候事と愚察仕候過日粗言上仕(以下缺)

奉 復密呈

孝 允拜白

(此書宛名を聞く明治三年木戸孝允が三條實美に贈りしものなり)

八〇 吉富簡一宛書翰 明治三年八月二十日

昨夜は御光來何も殺風景而已乍去御歸宅後は嘸々と好風景御樂み不堪想像候さては明廿一日夜歟又は御間ともに候へは廿二日之夜歟御光來被下度爲其態と相呈候草々頓首

八月廿日

鏡 面

(樂水は吉富簡一)

樂 水 兄御内々

八一 三條實美宛書翰 明治三年八月廿四日

謹呈今日參

(西郷は西郷從道)

(吉井孝助は吉井友實西郷眞倍は西郷從道)

朝言上可仕と奉存候處無余儀義有之殊に持病齒痛相發旁保養仕候内時刻相移申候間左之儀昨日西郷氏より承知仕置今日は言上可仕と奉存右之仕合に御坐候間此段不取取書中を以奉申上候先般御發令後鹿兒島藩より飛脚も到着仕候由之處一藩之都合も折合至極よろしく只管遵奉朝意仕候外無之とのよし申上る迄も無之事と奉存候へども實に重疊之儀大悦仕候然處士族等之所致旁今日より吉井孝助西郷眞倍歸縣仕候へは別亦都合之よしに御坐候間細之情實西郷氏より入々昨日承り其運に相成尙巨細之儀は御直に可申上と奉存候處此次第に付尙明日にも拜謁之上言上可仕候兵部宮内兩省にも格別差問は無之よしに御坐候右大略言上仕置候恐惶頓首敬白

八月廿四日

孝 允

(條公は三條實美)

條 公 閣 下内拜呈



八二 伊藤博文宛書翰

明治三年九月四日

彌御清榮と奉賀候過は忽御歸京に如何にも残念に奉存候横濱も昨今只々ナホレヲン被擒候風説而已此度は全眞事と申説而已に余程佛人ども驚愕浩歎之色相顯はれ申候乍去佛國益奮勵此後彌大戰に至り可申候此極歐洲之大勢も變換可仕歎于此又支那も不屈之情實有之是又不及戰爭は相濟間敷之風説頻に前途之方略不相立候は獨支那而已暗夜に走するが如く實に可恐事と奉存候別封は乍御面倒早々御届被下候様奉願候先は爲其草々頓首

九月四日

昨日御歸途には不二峰頭を御望被成候哉雨模様につ如何哉と奉存候何卒御近邊之山水御境内へ御取込被下候様御周旋奉願度いつれ九日十日頃には歸京仕度と奉存候實に弟之艱病も亦如佛國甚以難澁千萬中々容易に治療も出來兼候よし付は先一七日丈け治療仕いつれ再出港仕候

覺悟に御坐候今更致し方も無之任自然候外策無之尤不絶痛み候には甚困み申候間呼吸之有之中は打捨置候譯にも參り兼うるさき至に御坐候以上

芳梅 老兄御内披

尤

(芳梅は伊藤博文)  
(大隈は大隈重信)

大隈は出仕相成候哉

八三 林友幸宛書翰

明治三年九月四日

臥床中大亂筆御推讀可被下候以上

御手紙拜見仕候彌御清榮に御盡力大賀此事に御座候さては大隈出仕之事も同人所存之邊も有之隙取候事に付已に朔日にも彼方へ罷越候處彌二日より出仕と申事に付其次第承知仕候弟も直に出立いたし申候横濱も別に相變り候事無之ナホレヲン被擒候風説而已どふ歎此度は眞事と申事に佛人も驚愕浩歎之色有之申候乍去佛國益奮勵彌以大戰争に至り可申或

(大隈は大隈重信)



佛國之二三隊は一人も不殘討死いたし候由兎に角勇々敷事に御座候歐人米人など一般之説五歩々々之人數に候へは必佛之敗北は無之との説に於今日之勢に於佛一人に李五六人處により候は佛一人に李十人にも相當り候様之有様に於尤難苦と被相察申候佛にも逐々人數は召募いたし候由に聞へ申候于此又支那も不屈之色有之此後果不及一戰爭は不相濟との論説頻々兎角歐洲其他大勢之一變換と被相察申候獨り支那他國之事而已ならず屹度於

皇國も 御一新之條理を被爲踏強弱衆寡によりて大典を不被爲曲人心之方向被爲定月を逐ひ日を逐ひ候は御基礎乎御据り無之は可恐之事と奉存候かゝる時勢に當り候は人望をむさばり候もの其心實に更に相分り不申此世弊を相矯め不申は所詮國家之維持は出來不申世弊を矯候に付候は常人は盡くいとひ候事而已に於眼前に安途仕候様所致とては弟等元より目込無之古より忠臣義士之世變に逢中道にして不遂國家爲其に滅

亡いたし候事不少於當時は必其忠臣義士世の見る所と有異もの人望も無之事と被察申候人望之歸する所は則後世より見る所にして於現在に實に六つヶ敷事と被相考申候今日より別に改まはり候事はいか様人才を御もとのめ有之とも俄に致し方は有之間敷只々御一新之條理を被爲踏天下萬民へ之誓に不被爲違強弱衆寡を以大典を不被爲曲候得は人心之方向日に相定り於于此御基礎彌御確乎と奉存候別に愚見も更に無御座乍去御用被爲在候得は元より歸京可仕は當然之事に御坐候へども實に弟之齷病又如佛國甚難澁至極已に昨日へボンとエリアタと申米醫に見せ候處へボン申候には實に大事に於此余増長候時は頬肉を割斷し齷齷肉齷骨を切斷不仕は不相成元よりかゝる次第に相成候得は死生外之事に於無左とも已に一生之九分之地に至り居候事に付事々敷心配いたし候は治療を盡し不申ともよろしくと實はこゝろうるさく存候得共何分時々之痛苦に難堪不得止呼吸之有之候内はどふと歟治療不仕にも



(山縣は山縣有朋)  
(廣澤は廣澤兵助)

不被差置右兩人之内へボン申候にはエリアタ口中に病症を治療いたし事に長し居申候間先エリアタへ可相托と申候に付相頼候處中々日數容易に或は治療不相調五六十日も相かゝり候様申候に付何分此度一應歸京不致或は不相成候に付再出港可致候間一先治療いたし位候様相頼候處左候は先一七日丈けは滞港可致と申候に付其積りにて相かゝり申候實に人之しらざる困苦に岩卿始へも病氣の事を兔や角申候は心外に御座候へども有之儘無余儀申出候處是迄も皆偽病之様御推察に心中遺憾之次第に御坐候得ども致し方無之山縣なども是までよくこらへて居候と驚き申候御憐察可被下候空敷横濱へ滞在仕候様被思召候も奉恐入候に付先刻廣澤へも有之儘を申越し置相頼候仕合に御座候此段可然御取成奉願候朝々之治療に或も無事に參

朝仕候よりは余程難儀仕候事に付決る毫も病を欲し候譯は無之候得ども無詮方仕合然るを始終偽病様被相察候はいかにも心外之至に候得ども益々之治療に或も無事に參

九月四日

木 圭

(二木は林友幸)

二 木 兄内拜復

八四 西島青浦宛書翰

明治三年九月四日

亂筆御推讀庸助は大分沈着いたし候様相考少しは安心致候所二郎は好人物に候得ども何分勉勵氣無之候兩人とも爾後彌御平安珍重々々過日御頼み申置候一件可然御配意是祈候何分にも始一入精勵各々得意之事を餘暇に相學ばせ度先年余之處へ寄食せしものは勉強家多く候處近來は壯年之ものも盡迅速を相貴ひ申候余之齷病も余程難症に或此ま、捨置候或は大事と申しく懽物而已に成果必竟は余之罪に候へども余は晩年如何とも難致實に壯年之もの、爲に甚歎惜いたし定寄々畫十分之治療いたし候得は余程の日數も相かゝり候由たとへ再出港候と寝のみ歎と想像いたし余も亦午睡之間に思起し不取敢相認候足下は第一之長年に付御督責可被下候も一七日は治療仕らすは不相成と申候付は九日十日頃までは是非とも滞留不致或は不相成候大島出港之事は如何相決候哉もし一同御出港ど

(大島は大島正朝)

木戸孝九文書卷十 (明治三年九月)

百十三



もに相成候は、筆墨其外入置候赤き地たしか芦厂之如き青貝繪之有之候  
文庫を御持參可被下候御頼申候先は爲其草々頓首

九月四日

尙々新築之西ケ輪之壁にかへる之穴あり此穴たゝみ之上より幾寸に相  
成候哉是又御出港どもに候は、御しるし置可被下候御出港無之候は、  
自然一符中に御送り被下候得は無此上候以上  
書畫之一條は吳々可然御頼み申候以上  
もし大島と出港之都合に相成候は、其節ホンスをこして凡



是位之ビンに御詰め御持參可被下候以上  
尤ビンに不限何にてもよろしく

(青甫は西  
島青浦)

青甫 雅友

干 令

八五

普國公使館書記官「ケンフルマン」宛書翰 明治三年九月十一日

一書致啓上候爾後彌御壯榮珍重に存候頃日御尋可申と奉存兎角多用に  
御無沙汰申候さては此度同國之書生麻間鐵之助原田音之進と申候もの貴  
國へ罷出候に付に付何歟御申聞け可被成候付は原田音之進と申候もの  
一應御目にかゝり度奉存御旅館へ參上可致候間御都合相叶候は、御面會  
被下度此段得貴意申候草々頓首

九月十一日

尙々明日より横濱へ出張之由に付差かゝり參上仕候且又御閑暇之折に  
は何卒御光來可被下候以上

ケンフルマン様費下

木戸 孝允

(ケンフル  
マンは普國  
公使館書記  
官)



八六 伊藤博文宛書翰

明治三年九月十三日

過日は態々御光來奉謝候何も殺風景而已跡に承り候へは些福原清介同様之御困却有之候歟之由以後は何卒得と敵を御視察被成向鶏を猥りに牛刀御用ひ被成候様に或は兎角面白き御戦争は如何哉と奉存候于時別封被相頼候に付弟上包みいたし御手元へ出し置申候間御幸便に御頼仕候且又馬車之事は御多事の中に候へ共とふぞ無御失念御申越被遣候様是又御願仕候先は爲其草々頓首

九月十三日

允

(芳梅は伊藤博文)

芳梅 老兄御内拆

八七 大久保利通宛書翰

明治三年九月十三日

態と御答書御投與難有拜誦仕候全快仕候得は早速登門可申上候間御多務之中態々御光來を玉はり候或は奉恐入候間左様被思召置被下候様奉願候

先は爲其草々頓首敬白

九月十三日

允

大久保盟台拜呈

(大久保は通)

八八 吉富簡一宛書翰

明治三年九月十七日

御手紙拜見今日は大木と申人へ約束有之今夜どもに御坐候得は御引立可申候御滞京中早晚勿卒而已に付此際閑幽之一樂相催し度先は爲其草々頓首

九月十七日

松菊執事 因 碩

(九目は吉富簡一)

九目 先生

(此書は木戸孝九が基に因みて宛名を九目先生とし松菊執事因碩(井上)となしたるなり)

八九 吉富簡一宛書翰

明治三年九月十八日

木戸孝九文書卷十 (明治三年九月)

百十七



過刻は朶雲御投與に候處折柄客來中に御答も不得仕廿一日には少々前約も有之明十九日にあは如何に候哉乍去兄御誘引に預りあは難御堪候に付御得意之處へ御同伴可申候間無御腹臆御示し置可被下候草々頓首

九月十八日

樂水 兄御内披

(樂水は吉富簡一)

九〇 吉富簡一宛書翰

明治三年九月十八日

(大隈は大隈重信)  
(板垣は板垣退助)

今日一書差出候處明日俄に大隈板垣を不會あは不相成事出來仕候に付明日之處御斷仕候依あ此段得貴意申候草々頓首

九月十八日

吉富 兄御直

(吉富は吉富簡一)

九一 岩倉具視宛書翰

明治三年九月二十日

木 允

大亂筆

御高恕奉仰候敬白

謹啓先以

御清雅に被爲居恐賀至極に奉存候さて昨日は參殿緩々蒙御高諭奉萬謝候于時孝九再三再四奉言上候は何とも奉恐縮候得ども元來昨夏待詔院出仕等内歎願仕候心事は何卒支那歐羅巴等之大勢且情實も稍見察仕度一念に御坐候處不圖爲病に被惱彼是半年余も空敷消光仕候中支那朝鮮等之御内命をも奉蒙誠に難有奉存候然處昨冬舊藩より申立候趣も有之大久保一同西下仕候處存外之紛亂に示趣も一向貫徹不仕且々從二位丈け一同出京仕候位之仕合に且薩藩之情實におゐても未至時都合も有之彼は何も蹉跌之姿に御坐候處支那行丈けは六七月之間には相調候事と奉存候處不圖天津之變有之至今日候あは尙外務省におゐて専ら相謀り候様之次第に御座候間決局之處 御内命之邊も有之候御事に付時機を奉待候處歐洲大一

(大久保は大久保利通)  
(從二位は毛利敬親)



(柳原卿は  
柳原前光)

變之形勢と相成候に付支那致延引候得は一先彼方へ罷越度と昨年來之宿志逐々歎願仕候處更に御採用無之必竟昨夏一旦閑散を奉願候志も水泡に至り遺憾至極に奉存居候處昨日之御内諭を奉窺候は實に落膽之至りに何卒御憐察を玉わり支那之處も決る本使奉希望候譯には無御坐柳原卿も御賢明に被爲在且是迄御盡力も被爲游候御事に付改る御本使に被仰付孝允は乍不肖副使に亦も纔兩三月間之事に御坐候間被仰付候様奉歎願候且又來年に至り候は、決る使節等は其任に無御坐候得共一應歐洲へ罷越度と存詰罷在申候間只今より奉仰願置申候今十年之余命は萬々無覺束と奉存候間せめて今日之時勢をも一通りは見察仕置申度昨日も申上候通始終不快近來別る柔弱其とて此節達亦當職御斷等之歎願度々申出候亦も何歎主意有之候様世上へ相響候亦も不相濟誠に以片時も眞心不安候得ども今日まで相忍ひ罷居實に政府御規則等も被爲在候御事に付病中格別御寛容之 御沙汰に亦も奉蒙隔日位に出仕申上御用繁務之節は日々罷出候

様に被仰付候得は安心仕候亦東京に罷在候中は必參仕可申上候一應辨官よりにても其邊之 御沙汰を奉窺置不申亦は同列は不及申他人に對し候亦も如何にも難安只々奉恐入候天下之事は御方略を被爲定候上は此余之處必順序を不被爲逐候亦は御成功は無覺束其間は只々意心傳心而已御基礎と申候も天地神明に被爲誓候

叡慮御搖動不被爲在候得は則御基礎は益確乎人心之方向も一定可仕と奉存候此後之處は今日まで之如く迅速には相運ひ兼申候乍去御方略は訖度相定決無之亦は不相濟是はめつたに白人には御談論不可然と奉存候右之次第に付幾應にも心事御降察を玉わり乍恐素志相達し候様偏に奉歎願候誠恐々々頓首九拜

九月廿日曉

孝 允九拜

(岩倉公は  
岩倉具視)

岩倉公閣下内密拜呈



九二 野村素介宛書翰 明治三年九月廿三日

爾後御遠々敷如何被爲成候哉御發途も被爲近寄何歟御多務と奉察候過日  
來一兩度參上仕候處始終御留守中に拜青も不得仕候何卒

(土容堂公  
は土佐山内  
豐信)

御發途前に將來御運方之邊も得と御論決被爲在置度御事と奉存候さて又  
土容堂公へ先達亦御出後如何之御都合に被爲在候哉弟も其後は一向容堂  
公にも御面會不仕自然其まゝにも御坐候得は何卒神田御邸によろしく  
一日御招被爲成候方可然如御承知近來別亦彼藩よりは無隔意爲天下には  
御相談も仕候付亦は容堂公には分る我

(我が公は  
毛利敬親)

公などへは御心も御用ひ被成候御様子に付於此

御方も以禮御遇被成候方よろしく總亦老兄方御疎は不被爲在と奉存候得  
共萬一其儘に亦

御發途にも相成候亦は如何と奉存候に付そつと此段老兄迄相窺見申候先  
は爲其草々頓首

九月廿三日

木戸

(野村は野  
村素介)

野村 老兄御内披

九三 廣澤兵助宛書翰 明治三年九月廿五日

(大久翁は  
大久保利  
通)

態と御答書奉拜誦候朝鮮一條は別に愚存無之つまらぬ事之御着手よりは  
むしろ大久翁之如説來春頃まで之御見合可然と相考候事に御坐候昨冬も  
探索人被差越候節御不同意申出候處推亦被差越今日どれ丈け之御益に相  
成候事歟不奉存對州之臣禮をとると歟何と歟申事は強亦御懸念之事に亦  
無之決亦臣と稱する事は一切無之事に付從來交際上之不都合は百日や百  
五十日之差別は無之事と奉存候乍去被差越候亦害無之候得は只御金之御  
損位之事に付強亦拒論仕候ほどの事に亦無之然しつまらぬ事へ種々手  
を出し候事は堅く御禁可然と奉存候實を申さは清國に參り其より大條理  
を立著手仕が大上策と奉存候事に御坐候佛に亦も掃攘之見込有之候人有



之候得は朝鮮位之事は先は任御示諭大略申上置候間御含置可然奉願候別に愚存無御坐候草々再奉復

九月廿五日

允

(障岳は廣澤兵助)

障岳老兄内拜復

九四 吉富簡一宛書翰 明治三年九月廿九日

早朝御立寄之事御嘶申置候得共必竟一笑談故却る緩々御話し申方面白弟も今朝早々參仕候間後日之談と可仕候爲其草々頓首

(吉富は吉富簡一)

吉富兄御内々

允

(此書月日を聞く明治三年九月廿九日に贈れるものなり)

九五 下村珪太郎宛書翰 明治三年十月七日

昨日は朶雲御投與奉拜誦候今朝は些差岡申候間いづれ後刻都合可申上候

間甚奉恐入候得ども其間御猶餘奉願候今日はどの道御左右折角可申上と存居候事に御座候先爲其草々頓首拜復

十月七日

木戸

(下村は下村珪太郎)

下村先生御直

九六 門脇重綾宛書翰 明治三年十月十日

亂筆高恕

先以御清榮奉大賀候さて過日來度々相窺候一條縷々御深意之邊も相含且於弟も舊來之御知己にも御坐候に付何卒相叶候はと種々盡力仕見候得ども如御承知諸縣よりも此望み不少其外四方八方如沸是も開港地之官員と申事にも御坐候へは現場外國に取調らへ不申は不相濟件々も數多御坐候得共突然此一府よりと申候は甚以御六つヶ敷都合も御坐候由乍去尙此上好機も御坐候へば巨細御示之趣も有之無拔目精々盡力も仕可申候



へ共差向目的難相立其中時日も遷延仕候に付不取敢今日之景況申上置候  
間乍御氣毒可致御致意奉願候爲其草々頓首

十月十日

木戸允

(門脇は門脇重被)

門脇先生御内披

九七 西島青浦宛書翰

明治三年十月十四日

(廣澤は廣澤兵助)  
(三條公は三條實美)  
(い藤は伊藤博文)

食事をいたし候處へ廣澤より之書狀之内へ御堀耕助書狀をつゝみ置申候  
且又三條公御染筆も持參候事打忘れ申候何卒右之二品築地い藤へ相頼無  
相違慥に相とゞき候様御配慮可被下候爲其差急草々頓首

十四日

松 菊

(青甫は西島青浦)

青甫雅翁急

九八 杉孫七郎宛書翰

明治三年十月廿三日

御投書之趣い細拜承即謹答仕候さて壯兵登坂一件に付ては彼是と甚御不  
都合奉恐入候乍然來廿七日迄には必ず四百人之壯兵を集合可仕候間右様  
御含置可被下候前以一統へ加入之義に付頓に御布令も有之候得共兎角人  
々々々向引之強きには込入申候よつて士卒族外に元倍<sup>元倍</sup>臣十八才より三十  
才迄之現名五百七拾四人いづれも壯健之者にて去明暮之暴舉に管轄無之  
者兼取調置申候付右人數之内先二百人精撰之上改て  
上より加入被仰付候てはいかゝ可有御さ候哉尤右人數之外に連に願出候  
部は今日迄に百二十人有之候付明日醫院申請檢査可仕手筈御さ候書餘愚  
案之義に奉期拜鳳可申上候勿々頓首

十月廿三日

木 ト

(杉は杉孫七郎)

杉 様拜呈

九九 井上馨宛書翰

明治三年十月廿五日



(山狂は山縣有朋)

(三浦は三浦梧樓)

(岩大は岩倉具視大久保利通)

(鳥尾は鳥尾小彌太)

(横山は横山正太郎)

(松方は松方正義)

過る十一日之朶雲相達拜見仕候先以御壯剛に御盡力奉大賀候さて逐々愚意申上置其後如何と懸念仕居候處格別之齟齬も無之由一段之事と奉存候山狂へも十分に愚意丈けは相論し置彼も別に違論も有之間敷歟と存候まで談論仕置候得ども御左右不承中は如何と奉存候事に御座候一安心仕候○三浦之事も山狂へも相論し岩大へも弟より申出置候違論も無之に付御採用可相成と奉存候鳥尾之處は一同と申事は些六つヶ敷また折も可有之歟と奉存候○西隅之一條は實に可歎如此體勢故始終上之方も多はは是へ氣兼之氣味有之萬端彼流儀に不落入るは御發行も六ヶ敷姿元より大久保なども彼藩へはいれられざるに相違無之自分も今日は朝臣決る藩へ頓着は無之と申候も自然藩論に叶候様にとは成勝に御座候も横山集議院へ出せし上書に基き候次第に已に懸念至極之次第は筑論なども余程緩歟と被相察候事御座候是は渡邊昇松方ども同様にも意外之説を唱へ居候よしに御座候強弱衆寡によりて所致いたし候様に  
國家之大典何を以

相立候哉愚人と雖も解し易き事に御座候處堂々たる先生顔に盡如此事を申出し候もは實に不堪慨歎候○弟も過日倍隨仕候も横濱へ罷出直に療養に相残り御書面も爰にて拜見仕候間御心事之事は未承不申候歸京之上承知可仕候何分天下之事もわからぬ人は一向不相分りし人は分り過天下萬人中に一人と申事も今日之處に未六つヶ敷御座候處兎角分りし顔之人は傍若無人之氣味有之是また勢と申もの歟又は却る是がよろしきか一向不相知候へども今日上之處に未は爲其に却る不都合不運も不少候先は御答旁奉呈候其中時下御自玉第一に奉存候草々頓首拜

十月廿五日於横濱認

尙々過日宍戸三郎にも面會仕候長州論に筑之事も申立候様申聞ヶ置候前原も不日歸藩仕候よし過日老兄且山田より被仰越候邊も有之虚心を以相考候も東京に滞留いたし候方可然と存少々周旋仕見候へども廣なども大量と申もの歟  
意味不相分  
いづれにもよく計らひ候様に彼等も出入相

(宍戸三郎は宍戸磯)  
(前原は前原一誠)  
(山田は山田顯義)  
(廣は廣澤兵助)



頼候よし歎一定不仕其中歸り候に相決し申候○承り候へは西洋食事に  
佐々男也尤いけざるよし野村などより頼に承り申候  
 あり日々卯二つにパンポートルなど御用ひよし承知仕以の外之事と奉  
 存候其は如弟ものにしたし候事に老兄など如此事御座候は天下四  
 方婦人之名あるもの此上いかほどの迷惑に至り候歎も難計必々可相成  
 は大仁慈と被思食朝食は不及申こふのもの、茶漬精々肉類御禁シポー  
 トルミルク之類不能申候謹ち御忠告申上候以上

(世外は井上馨)

世外 老兄御密拆

干令

一〇〇 柏村數馬宛書翰

明治三年十月廿六日

亂筆高恕

(久保は久保勘三)

久保氏も頼に歸鴻と奉存候御序之節可然御致聲奉願候

朶雲奉拜誦候向寒之節先以

上々様御機嫌克御坐被爲游御互に奉恐悅候過る十九日

(從二位は毛利敬親)

(大樂は大樂源太郎)  
(富永は富永有隣)

從二位様當港御發艦被爲在頃日は御歸藩被爲游候御事と奉恐察候將又老  
 臺御壯榮に引つゝき御盡誠奉大賀候分亂之末旁不一形御配慮之御事と奉  
 存候脱卒とも、逐々御手に入候由大樂富永は久留米邊に潜伏仕居候に相  
 違無之歎と奉存候其譯は渡邊昇於長崎久留米之古松澗是は清水正人と申馬關米賊之一人に多大樂富  
 永等之同類に面會仕其節之口氣に類に大樂等冤罪之ことを申陳し面會をも  
 致したる様子に御坐候時々久留米豊後邊等御探索相成候は、其中には一  
 々相分可申と奉存候佛式も屯所御造立等相成候由宇内之大勢一變仕候に  
 付るは漸々人々之耳目も一變不仕るは不相成譯に御坐候得ども天下未萬  
 人中に一人位之處に誘導之工合中々六つヶ敷乍去於前後其得失不少實  
 に不容易御苦慮と奉存候御賢息様にも彌來月四日より御渡海一昨夜も緩  
 々御嘶仕候字佛之戰も未鎮定之目途無之佛人は益奮起人々皆戰鬪之用意  
 而已にち只々斃る休矣之覺悟實に各國人之談にちも前代未聞之大戰と申  
 候米南北之戰三年間に四十余萬之死傷セバステホル之戰四國合して二年余間に雙方二十  
 五萬之死傷此度佛字之戰爭六七十日間に殆五十萬人之死傷にちも其大戰被想像申候



詰り此決局に於又世界之形勢も一變可仕候御渡海も如此好機會之節無御坐候先は一書呈上仕度如此に御坐候其中時下別御自玉第一に奉存候近況は當節は日々御承知と奉存當地之事別に不申上候草々頓首拜

十月廿六日

尙々洋行人之一條い細杉氏へも申越尙山縣吉田なども承知に罷歸候間早々御連奉願候拜

數馬 老 臺御直拆

孝 允

(杉は杉孫七郎)  
(山縣は山縣八吉田は吉田右一)  
(數馬は柏村數馬)

一〇一 杉孫七郎宛書翰

明治三年十月廿七日

例の大亂筆御推覽奉願候且又久保山縣正木吉田其他諸兄へ可然御致意奉願候

爾後彌御清安奉大賀候尙過日は朶雲御投與奉拜誦候先以過る十九日は從二位様御機嫌克御發艦被爲游頃日は定る御歸藩被爲在候と奉恐察候逐

(久保は久保三山縣正木は正木基介吉田は吉田右一)  
(從二位は毛利敬親)

々東地之近況も御承知と奉存候春來引つゝき別御盡力不一形御苦慮と奉察候天地大變遷之之折柄實に二三百年之勘定を一歲に引受け候様なる姿に於隨而百事之遷移も自然迅速なる譯に御坐候間偏地に於駕御誘導之術一入御難澁と奉存候乍去用捨仕候を捨置候ときは行かゝり候を熱湯を吞み候様之艱苦出來仕候次第に御坐候間將來は小學中學校等之處へ御手を被爲盡士族は元より農商に至り候も學文之出來候様之御趣向相立候事實に爲前途に肝要至極と奉存候是迄之儒士族を御奇責有之候とも其子孫を教育仕候事は其道訖度御開き置無之は覆育之御主意にも不相叶儀に於其餘歸農歸商各所望へ御任せ被成候は元より之御事と奉存候小學中學等之處は於

天朝も御規則可相立いづれ天下一般之次第も可有之と奉存候得共今日之大勢を察し無用之事を御除き御教育之御規則相立居候は、天下一般之御規則相定候上に於もまた如何様とも相成可申と奉存候柏村翁などと得と

(柏村は柏村數馬)



(野村は野村素介藤井勉は藤井勉三)

御相談被爲在候は、必細密に勘考も可有之世界國盡などの如きものは小  
學舎は不及申手習場等にて一般に習讀いたし候様御世話有之度其他逐  
々爲教導有用之譯本等は端から御取寄せ相成度野邨藤井などへも逐々相  
論し置候へとも尙御國におゐても御論一定被仰越置候は、御運別可然  
と奉存候佛字之戦争も中々相治り候様子無之此後如何立至り候哉難計候  
其に付横濱などは蠶卵紙之直段甚下落日本中にては千萬金も損失に至り  
可申昨年は日本凶作に余程諸方難儀いたし候へとも支那印度米二百萬  
石程も入津無左は幾千萬人之死亡に至り候歟も難被計今年はまた昨年  
より引つゞき支那印度米之入込居我豊作等にて米價も存外下落仕候様な  
る事に此損あれば彼益あり彼益あれば此損あり付は産物等も已來世  
界之形勢を御洞察に御開き相成度いづれ日本之大産物は糸茶蠶卵帛之  
三品に御國などは逐々茶と糸が第一と奉存候米などは元より御世話肝  
要之事に申までも無之候得とも地味によりては茶などは御開有之度必

(柏村は柏村庸之尤檜崎は檜崎頼三)  
(周布金槌は周布公平)  
(光田三郎は光妙寺三郎)  
(小倉右衛門助は馬屋原次郎)  
(吉田卯一は吉田右一)  
(河瀬は河瀬眞孝青木は青木周藏)

しも米ばかりと申が勸農と申譯にも有之間敷是等も俄には御六つケ敷候  
へども漸を以御着手被爲在度奉存候此度柏邨檜崎などは兵部省より佛行  
おとゝのひ岩國人も兩人參り其他已上十人位同行有之申候于時周布金槌  
光田三郎小倉右衛門助などは最前より兵部省學校へ入込讀書は相すゝみ  
居候へども弱體と申事に當夏被相除候處學は元より檜崎ともよりは相  
進み居且各志も有之決る廢人と申譯にも無之且御藩内におゐては佛は先  
學之部に付藩より之御願を以佛國へ被差越度い細山縣彌八吉田卯一郎と  
得と相談し山彌も同意之事に  
老公へも申上置候河瀬青木などは從  
朝廷より御入費は被立下候様相成其余之ものも逐々其運學之依進歩可被  
立下候三子なども相進み候上は從  
朝廷可被立下候今日之機會を失し候は其得失不容易候間只及  
君上御聞候までと申事に御坐候間早々御詮儀之上被仰越被下度奉願候



(津田は津田出)

左候は、一應弟へも御詮儀之趣御示し被下度左候へは又訖度相戒置邊も御坐候且又鳥尾小彌太と申候もの留學中紀州へ罷越候處津田大參事逐々面會終に彼藩へ相ど、め只同人などの含を以參事立場之事も相談いたし候間眞之御含までに弟まで津田より申越候との事に御坐候間此段御含置被下御序に御上へも御尊奉願候無左るは自然また先に不都合有之候は不相濟候先は爲其奉呈候其中御自愛第一に奉存候草々頓首拜

十月廿七日晚

干令居士

(猿村は杉孫七郎)

猿 邨 老 兄 御密拆

一〇二 中島佐衡宛書翰

明治三年十月廿七日

亂筆高許

老兄に何卒御案内是非奉願候且<sup>五六</sup>又人はよろしく御人數之處も御答之彌御壯榮奉賀候先日は罷出蒙御高意奉謝候さては其節粗御談申置候一條

御序に御聞せ可被遣候以上

得と勘考仕見候へは別に余日も無之何卒今晚第五字過より崎陽亭へ御招仕西洋食事なりとも御饗し申度候間何分之儀御決答奉願候爲其草々頓首

十月廿七日

木 圭

(中島は中島佐衡)

中 嶋 契 兄 御直念

一〇三 中島佐衡宛書翰

明治三年十月廿八日

昨夜は雨中別々御苦勞奉存候彼是之仕合に時刻遷延甚奉恐入候今日は御風邪如何被成候哉且又艦將姓名牛堀何と申候哉失念仕候鳥渡御示し奉願候爲其頓首

十月廿八日

木 戸

(中島は中島佐衡)

中 島 様 御直拆



一〇四 井上馨宛書翰

明治三年十月廿九日

先以御壯剛奉賀候別番は佐倉縣大參事差出兩總之地情等之云々も御座候に付則御手元へ御廻申候草々頓首

十月廿九日

世外老兄御直

允

(世外は井上馨)

一〇五 伊藤博文宛書翰

明治三年閏十月四日

昨日は參上御妨申候上種々蒙御馳走奉謝候さて明日は三四字頃より御誘引可被下候細君にも御光來に候へは別難有乍去遠方故此折柄強御勞し申候は却不安候間思召次第に奉願候いづれ御尊之少女どもは所詮六つヶ敷不任御心底も當然と奉存候間何卒松春等如き之ものにも却内外之御便利と奉存候間御召連可被下候先は爲其草々頓首

閏月初四

尙々弟も今日は下痢に甚困却打臥申候ホーフドテレガラフ御返却甚延引仕候則御持せ申上候當分自然御不用に御坐候は、又々拜借被仰付候へは難有奉存候以上

芳梅 兄御直披

允

(芳梅は伊藤博文)

一〇六 大久保利通宛書翰

明治三年閏十月五日

亂筆高恕

尊書奉拜誦候先以御清適奉恐賀候さては別紙御書付御示拜見仕候過日來粗  
廟堂之御様子も相窺且同局中之議論も傳承仕愚意丈けは申上試候乍去如御承知弟兎角爲病に被惱近來尤難義仕如何様存候も荒職に至り甚以不安奉存廿日三十日之事に御坐候へは元より斃るまでにも於時機は勉強も可仕と存候得共平常之處實に難相堪却奉對



朝廷候も奉恐懼候次第深く痛心仕候尙いつれ拜青可申上候得とも御答  
まで奉呈候草々頓首敬白

閏月初五

(伊藤典醫  
は伊東方  
成)

尙々不快之程御尋難有奉謝候過日押外勤仕候處横濱已來之不工合治  
り兼居昨日伊藤典醫などよりも嚴敷被戒服藥保養仕候今日は少々快く  
乍憚御放慮奉願候拜

(甲東は大  
久保利通)

甲東 盟 臺拜復

允

一〇七 西島青浦宛書翰

明治三年閏十月九日

(竹田は田  
能村竹田)

御手帑之趣承知實に竹田翁之一卷一見不能忘どふそ相求度と工夫いたし  
候へども此節〇の一件手元に不都合切迫之事に付如何とも難致不得止雲  
烟過眼と明らかめ申候何卒先方へ可然御斷可被下候爲其草々頓首

閏月九日夜

松 菊

(青甫は西  
島青浦)

青甫 足下

一〇八 伊藤博文宛書翰

明治三年閏十月十二日

(ポードイ  
ンは洋醫)

乍御面倒御一答奉願候

昨日は御先へ失敬仕候さてはポードイン明後十四日三字頃罷越候との事  
に御坐候處天氣に候へば何卒染井之方へ相招度病院より馬車に罷越候  
へは格別手間取候事も有之間敷と相考申候千萬御手数之義奉恐入候得と  
も一應貴兄より直に御懸合被下候へは別々仕合申候先は其御願旁草々頓  
首

閏月十二日

木 戸

伊 藤 様御直拆念

(伊藤は伊  
藤博文)

一〇九 伊藤博文宛書翰

明治三年閏十月十三日

木戸孝九文書卷十 (明治三年閏十月)

百四十一



今日は御手紙拜見仕候色々御手数恐入奉り候さては過日來大御留連之様子如何之御所業有之候哉不審至極に存申候ホートインは彌明日染井罷越候に付如御示是非ホテルより心得候もの一人付添候様御願仕候爲其草々頓首

閏月十三日

尙々食事は明晩閑叟公へ被招候へは別に不相構候に付彌明晩蓮池邸參り候歟御家來に鳥渡大隈方へ御聞せ御一答奉願候拜

伊藤 藤 様御直

木戸

（閑叟公は鍋島齊正）  
（大隈は大隈重信）  
（伊藤は伊藤博文）

一一〇 北川清助宛書翰

明治三年閏十月廿四日

爾後彌御清榮奉賀候近來は兎角取紛御無沙汰に打過申候引つゞき不一形御配慮と奉存候さては柿野三郎と申候もの御世話に昨春來召遣申候處當春私歸國中にも段々不都合而已仕爾後も逐々異見教訓いたし謹心に相

勤候様屢申聞け候ども始終不埒之事而已に遂には無言に四五日も外出等の事而已一向同朋などの忠告も聞入不申一統之取締りにも差響候に付不得止幸便に歸國爲仕可申と存無届外出等決る不致様に被申聞置候處又々竊に外出七八日も歸宿不致其中居所等も相分り候は、早々詮議爲致差歸し可申と存候へとも誠に致し方無之次第折角御高配被成遣候處右之行が、りに御座候間此段不惡御含被成置御序之節家元へも御洩可被遣候私も彼是多事之上多人數中に、如此事出來心外至極且又先生へも申譯無御座候へとも如何とも難仕御降察可被下候御國も御靜謐之由一段之御事に奉存候東京も一向相變り候事無御座候先は右之趣申上置度奉呈候其中時下御自愛第一に奉存候草々頓首

閏月廿四日

尙々鈴木又七此度歸省仕候間尙又御承知可被下候御序之節重見へも可然御致意奉願候以上



一一一 鈴木直衛宛書翰

明治三年閏十月廿四日

亂筆高許

其已後は兎角取紛御左右も不仕候處彌御清安奉賀候于時御賢息も逐々御出精に候處近來時勢も日に進歩少壯之ものなども方々より遊學多く學校其外諸塾も充滿且々入費相調候ものは逐々洋行等も仕候處御間も有之間敷候得ども兎に角年々千兩位は相かゝり候事に付決る容易に難申上可相成は何卒東京に御學び相成候へばと存申候處御當人も世上之様子段々御承知又洋行之上御修業相成候得は其進歩も迅速なる邊逐々御存に付是非とも一應御歸國之上御兩親へも得と御相談洋行御果し被成度御心志に付御運ひ相成候事に候へは無此上事に御座候得共また一ヶ年二ヶ年に必成就と申事にも不相成候間厚く御談合之上ならては不相成且僕よりも

御心志に付候は御尤之事と相考候得ども御入費之處又如何之御様子にも候哉と存申候間爰元にも如何とも難致依る御當人之望みに任せ一應御歸國之邊御同意申候間細之趣は御直に御承知可被成候先は爲其相呈候時下別る御自玉第一に奉存候草々頓首

閏月廿四日

尙々御満堂様へも可然御致意奉願候以上

直 枝 様御直披

準 一 郎

一一二 杉孫七郎宛書翰

明治三年閏十月廿四日

亂筆高恕

朶雲御投與奉拜誦候彌御壯榮に引つゝき御盡力奉大賀候御改正事も逐々御運と遙察仕候東京も都合無異御屋敷内も至る靜謐御放意可被成候さては過日洋行生之事申上候處又々何歟河瀬青木等之事も御不審に被思食重



(野邨は野村素介藤井勉は藤井勉三)

被仰越候由付は野邨藤井よりい曲承知仕候最前申上候通河瀬青木は

(山縣は山縣八)

朝廷費用被立下候御都合に相運申候且又洋行生一條之事はい細之事は老君上にも被知召山縣翁もい曲承知に被歸必竟御藩廳より御指圖相成候事と奉存候得共現場之處見分仕且世上進歩之勢に付候は捨置候に不忍其上周布始於私情は親父之志も爲相告度と弟なども自腹を破り少々は助力も仕居申候處於今日は御藩内丈けに過日申上候人は公評に決不都合は無之事と奉存候尙此上は思食次第に可然御評決奉仰候  
○井上省三と申候もの氏家鈴助より之申立に御許容を被遂修業被仰付候に付弟同行上京仕候處當時孝人の方へ入込實に刻苦仕候學業も書生中にあは上等之部に御坐候所稽古料一兩二歩位之事に余程困苦仕居候由に御坐候得共此人物誠に沈實之質に一向友人其外へも無心等不申出候様子に御坐候所他より何分今日之御政體に我藩などにおゐても一統

(柏は柏村數馬山は山久保三正は正木基介平國は國貞廉平) (猿村は杉孫七郎)

之御改革御坐候に付候は如此ものこそ將來爲天下に御引立可有之之處元の倍臣と歎申事に今に一兩二歩に世間無類之月給を以修業爲致候など申事よそ耳に承知是等之事一々御承知之筈にも無之候得ども近來諸藩尤書生引立等之事は盛に一入手を入候様子に御坐候間何卒凡御規則等も相立度事と奉存候井上省三之學才人物等は氏家鈴助へ御尋相成候はい細相分り可申其上に至當之御詮儀被爲在度奉存候○平原平右衛門之むす子自力に洋行商法等も彼之仕方を相學度由内々申陳候に付今日は天下一般何人にも依願被差免候に付歸國之上可願出序之節先生まで弟よりも可申上置と申聞け置候間是又至當之御詮儀被仰付度奉存候先は急便故用事而已申上度奉呈候其中時下御自玉第一に奉存候草々頓首拜

閏月廿四日夜

尙々柏山久正國諸翁始へ可然御致意奉願候拜

猿邨老兄御直拆

孝允



(別紙) 鈴木直枝悴東京に於洋學修業仕居候處此度洋行自力を以いたし度由に於一應親父へ相談旁歸國いたし候に付彌相決候は、御許容被遂候に至當之事と奉存候今晚相頼候に付乍略儀加筆申上置候拜

一一三 大久保利通宛書翰

明治三年十一月五日

大亂筆高恕

朶雲奉拜誦候先以 御壯榮奉大賀候さては過日御示談之一條諸彦へも粗御嘶仕候通所詮一定不仕乍去元來老臺においてはいつれに歟公論之所歸如何様とも可被成との御事に付可成丈け迅速いつれに歟相決し候方可然と奉存催促仕候處今日は問之人も有之候由に付何卒七日には是非差繰有之度段廣澤へも相談置且條公には今朝書狀を以申上置候次第に御坐候必條公におゐて御承得被爲在候事と奉存候此段可申上置と奉存失敬仕候弟も風邪に候故歟昨夕以來腦頭を病み甚困苦仕候醫者之すゝめにて避客居

(廣澤は廣澤兵助)  
(條公は三條實美)

直に御答も不申上御容赦奉願候餘は拜青可申上草々頓首拜復

霜月五日

甲 東 老 臺内拜復

(甲東は大久保利通)

一一四 大久保利通宛書翰

明治三年十一月十六日

平生之御高意に甘へ内外無腹臆亂筆に奉呈候よろしく御容赦奉願候以上

(條公は三條實美)

拜啓先以 御壯榮奉恐賀候さては昨日鳥渡相窺候通御新報之御様子粗條公より拜承仕實に雀躍仕候元々於大體東西御齟齬仕候様無之義は不待言と奉存候得共今日之情實兎角不通よりして自然  
朝旨をも如何哉と存候もの有之於長州も如昨冬不都合出來今に殘徒も九州邊潜匿煽動いたし候なと之風評も有之且其上筑肥豊なと之間に於御舊藩之事とも種々意外之風説いたし隨其謬聞に迷ひ無頼不平之徒も



自然と落合益九州邊も痠痺爲其に逐々舊藩より着手いたし候得とも今以更に其所詮無御坐此趣逐々東京へも申越候是非々々

皇國御安堵に至り被對海外候も屹度御卓立之御基相立候までは長州なとは誓ふ御舊藩之御驥尾に隨ひ御奉公仕終始を全く不仕は不相成候處已に如今日姿には前途之處も如何と爲舊藩にも甚懸念仕萬々一心得違候ものとも各々之議論相唱候様に於て奉對

朝廷候も不相濟而已ならずと深く杞憂仕候已に昨年も 先生之御高論相窺今一層盡力仕候心得に於歸藩仕候處豈計御承知之通之次第に於只々赧顔之至に御坐候付は過日於下田も粗申上置候通常冬一應歸藩仕舊藩之知事始御舊藩之御高論相窺益御驥尾に隨從仕隨九州邊之痺病も快氣仕候様盡力仕正は正邪は邪判然相成候上は則條理之存する所を以明白に御處致被爲在度然る上は

朝廷之朝廷たる處相立可申少々藩政等改革仕候とも凡前途之大目的不相

定は築室途にはかるか如く終に論定る之日なく今日世上之議論も過半は中西國之事に而已相涉實に慨歎仕候付はいつれ參上仕候も委曲尙御高論を奉窺度奉存候得とも自然 先生御歸藩之御都合に於ても被爲在候得は前後と申候もの歎は又は御一同歎に是非弟も相發し度昨年御高論之御坐候邊も實事に涉り其目的相定候上は必然漸を以進歩之御運は相立候事と奉存候一應大略相窺置度奉呈亂筆候草々頓首九拜

霜月十六日

尙々過日御高評も御坐候歐洲行御沙汰之一條も不日御決定に相成何卒此機に村田中村伊集院諸君方始御發し之御都合に御運相成候は、他日皇國之御爲と被爲成候事も不一方と奉存候尙御沙汰之一條も御高按奉願候拜

甲 東 老 臺御密拆

松 菊 頑 夫

(村田は村田新八)  
(中村は中村半次郎)  
(伊集院は伊集院金次郎)  
(甲東は大久保利通)



一一五 檳村正直宛書翰 明治三年十一月十七日

大亂筆高恕

爾後彌御清榮に御盡力大賀此事に御坐候さて先達は朶雲御投與殊に煎  
茗御惠奉謝候御地も逐日安着に趣き候由一段之事に御坐候東京都合相變  
り候事無之乍去米取締り等も十分ならず必竟其人に乏敷故と存申候不日  
御地へ廣澤罷越候に付い曲御承知可被成候歐洲之光景も益變遷付は近  
來渡海之人も不少皇國も進歩之目的不相立候は今日之形勢決る歐洲之  
事而已ならず可慎事と被相考申候魯字得勢候ときは歐洲も平均を失し候  
は不待言次第に而此末世世界之光景如何變轉仕候哉難被圖何卒御地之處も  
兼る御目くろみ通り逐々商人等にも有志之もの渡海仕各々自主之權丈  
けは相立候事を知り候様いたし度ものと奉存候先は一書呈し度如此に御  
坐候其中時下御自玉第一に奉存候草々頓首

霜月十七日

(廣澤は廣澤兵助)

(十八眞は  
横村正直)

尙々千萬乍御手数別冊大坂へ御届け奉願候同人此節は大坂へ出張に而  
御坐候以上

十八 直<sup>て</sup> 兄御内披

木 圭

一一六 船越衛宛書翰 明治三年十一月十七日

亂筆高恕

爾後先以

御壯榮奉大賀候兎角東京にも御無沙汰申上候此度は何歎と御地兵部省  
御引受け之件も御配慮と奉察候さては卒爾ケ間敷申上候は何とも奉恐縮  
候得ども御舊藩此節之御情實老兄方乍失敬從來之御高志窺居候は實に  
御胸中恐察申上何とも不堪申上如御承知今日天下之形勢も一變仕彌  
皇國隆盛仕候へは今日之進歩人力之不所障付は斷然於此處變禍却而  
皇國爲前途に確乎たる御都合被爲在候は、從來



(知事は淺野長勳)

知事様を奉始勤

王之御主意も益御貫徹一段之事と奉存上候得共然し數百年之舊習と申事も御坐候る口筆に相論し候は容易に御坐候得ども中々實事に至り候は甚以六つケ敷舊藩などにて中々此邊合點に入候ものは甚稀に弟等かく申上候は可耻之至に御座候へとも御舊藩今日之御關係出來仕候に付るは實に御氣の毒に堪へ不申積年之御都合も相窺居候事に付 老兄方之御心事御察し申上不顧不敬奉呈候尙不日廣澤上京仕候間思食も御坐候は御面會可被成遣候弟等も毎々御尊而已申上候且又條公方へ被仰上公明之御衷情御訴被爲在度御坐候は御容赦なく被仰聞可被下候盡力可申上候先は爲其奉呈候草々頓首

(廣澤は廣澤兵助)

無御腹臆御談

霜月十七日

船越 先生御内拆

木戸

(船越は船越徳)

一一七 平岡通義宛書翰

明治三年十一月十九日

亂筆高恕

爾後御清安奉賀候過日は參上御妨申上候色々御馳走被仰付奉謝候さては其節粗御嘶仕置候招魂社之外東京府へ屬し候處は早々東京府之管轄と相成候様故大村兵部大輔など存生之節も凡地位相定り候上には限りを斷然相立候都合に付早速被仰出候は如何不日弟も廣澤も鳥渡他方へ參り候歟も難計付は一兩日中にも被仰出候方可然歟と奉存候左候は一論仕見可申候已に廣澤弟など之家にゐたとへ得買仕とも頂戴仕候とも招魂社管轄には甚不條理歟と相考へ申候先は此段御内々申上置候草々頓首

(大村は大村益次郎)  
(廣澤は廣澤兵助)

霜月十九日

尙々

御令聞様へ可然御致意奉願候且又男子御出門は如何に御坐候哉不日め



て度御様子可相窺と只管御浦山敷奉存候拜

(平岡は平岡通義)

平岡老兄御内拆

木圭

一一八 大久保利通宛書翰

明治三年十一月三十日

朶雲敬誦仕候先以御清適奉賀候さては態々蒙御答書奉恐縮候過日愚案之餘不顧老婆心申上候迄之事に御坐候必々諸彦御疎は不被爲在御義と元より信認罷在候事に御坐候御繁務中態と御枉車は實に恐懼仕候付自然御用事にも御坐候は、伊藤なりとも御示奉願候先は爲其草々頓首拜復

(伊藤は伊藤博文)

十一月卅日

孝允

甲東老臺拜復

(甲東は大久保利通)

一一九 大久保利通宛書翰

明治三年十二月七日

拜啓先以 御清榮奉大賀候昨日は態々御光來奉萬謝候夜中參堂可申上と

奉存取紛失敬申上候さては過日御嘶仕置候通日田邊暴動之一條始終諸藩之兵を勞細末之處致而已に當季々々之計らひ位に實に取締之邊も中々底徹不仕竊に不絶愚民を煽動仕候様に更に御主意之貫徹仕候目途も無之隨諸藩までも自然

(大納言は岩倉具視)

朝廷上を蔑如仕候様成行甚以不都合至極と奉存候就るは委曲過日申出候次第に御坐候間此余之模様により大納言公臨機之御決斷を以浪華之兵隊日田へ被差向底徹取締被仰付候は、別可然と奉存候始終諸藩之兵を御遣有之候とも思食通十分盡力仕候邊萬々無覺束と奉存候御發途前可申上置と奉存尙御高慮も相窺候覺悟に遷延仕奉恐入候依る兎に角今日大納言公の尙又具に言上仕御差圖を窺候心得に御坐候間左様被聞召置可被遣候何卒其上御高案之邊も御坐候は、十分御示諭を奉願度奉存候爲其草々頓首拜

極月七日朝

木戸孝元文書卷十 (明治三年十二月)

百五十七



(甲東は大久保利通)

甲 東 老 臺御直拆

允

一二〇 大戸璣宛書翰 明治三年十二月七日

爾後先以

(野村は野村素介)

御壯榮に御奉職奉大賀候さて出立之節は馳違不得拜青残念至極に奉存候於横濱野邨氏にも面會い曲此度之都合御承知被下候と奉存候于時日田一條頓に御承知も可被爲在始終如此御不取締にあらは兇徒ども不絶愚民を煽動し爲其に遂に良民も誤方向迷惑致し候もの不少益御威令も不相立隨ふ諸藩等も

(大納言は岩倉具視)

朝廷上を蔑如仕候様成行甚以不安事と奉存候付るは下坂已來得と相論し大納言公へ相窺臨機之決断を以早速浪華兵部省出張より巡察使被差向兵隊をも被差出徹底御所致に至り候様盡力仕候此程大島郡之勘場も賊徒三十人ほど襲來一時は及亂暴候由早速浦之兵隊出張一人打留一人捕縛いた

(雲井は雲井龍雄)

し候様子其餘は盡散亂乘來候船を盡取押へ候處皆豊後地より出し候由且逐々探索等も手を盡し見候處おもに久留米之浮浪ども相集り其より豊後小藩之間などを往來仕候様子久留米よりは浮浪どもへ金子等も相與へ先相かこひ候由に聞へ申候浮浪之主意は何卒大に外國と隙を開き候趣向を立天下を無余儀死地に陥れ候策を相企候様子彼徒にも元より虚喝候もの不少候得ども萬一無譯外國人等へも及亂暴候は不容易御厄害に至り候間三府并に開港場等は別あ一入嚴重に御取締相立不申は不宜と奉存候官員之内にても中々油断之不相成もの不少候間御内密三職へも御相談御引受け之處よりして早々御着手相成候様奉祈候久留米人八人ほど相脱し東京へ罷越候一説も御座候於西京も久留米邸内へ兎角浮浪潜伏之由に相聞へ申候實證見糺し候は、断然踏入候及捕縛候様いたし度と存申候奥羽諸藩などへへも種々手を廻し煽動を計り候事も有之候よしに云井之申口とも符合仕候事有之候様被相考申候乍此上御油断無之様御盡力奉祈



候先は爲其奉呈候其中時下御自玉第一に奉存候草々頓首

極月七日

(米田は米田虎雄)

尙々三四日前色々風聞御座候に付東本願寺近邊におゐて肥後二人捕縛是こそと申候證跡も無之候得とも兎に角肥後藩此度之改革等不平よりして脱走仕候ものに付多少之妨害は可致と被相考申候野村は米田などとも懇意之事に御座候間此段御嘶し可被遣候右之二人は於西京彼藩邸へ相渡し申候別紙申口之一書も御送り申候肥後も何分於内輪不平之徒不少よし米田なども此際決る油断不相成藩内之事も乍此上疎無之様野郎よりも談話いたし候は如何哉と奉存候逐々脱走人又は大樂等へ相通し候もの有之始終肥後之事も世上には累卵の如く相聞へ不穩候先は其而已申上候拜

敬宇 大兄御内密

千令生

(大樂は大樂源太郎)

(敬宇は尖戸磯)

一一一 品川彌二郎宛書翰

明治三年十二月八日

爾後彌御壯榮無御滯御着歐と奉存候引つゞき逐々歐行いたし候ものも不  
少候間

皇國之近情も委曲御承知と存申候近頃英魯之事等も相聞へ歐洲之光景如何哉と存候獨り歐洲之事而已に無之曾て毎々御嘶仕候通寰宇之形勢今日國を有するもの覺悟無之は各小忠小義に安心仕却て不知々々他日之大不忠大不義に陥り申候實に寒心之事と奉存候然るに  
皇國開化之進歩も中々其運び六つケ敷十に二三も如思には參り不申世間之人民は差置官省中にあも七八歩は機嫌をとり誘導不仕は諸事合點に入不申皆政府あつて之人民位之心得に人人民有て之政府たるを不悟歎息至極に御座候諸國諸藩は實に區々に困り申候乍去一昨冬より昨春へかけ版籍返上論よりして直に天下之力を一にし兵制刑法は不及申全國の力を以國を不相建はならぬと申論も相起り居一昨冬昨春は今日殺さるゝ



(大樂は大樂源太郎)

歟今殺さるゝ歟と覺悟仕居候處自然殺手も減し候様相考へ申候乍然中々油斷不相成また此節も日田縣を襲ひ大島郡を襲ひ候と申風聞有之彼大樂徒の類廢寺に付坊主不平の徒浮浪其外種々之もの嘯集候よし巨細之事實は不相分候へとも一暴發には相違無之金銀等大分賊し候由兎に角此度は底徹御處分無之は不相濟と頻に用意仕候兼て御嘶申候事も有之候歟と相考へ申候が愚案に一之新聞局を相開かせ度内國之事は元より外國之事も盡我人民之心得に相成候様之事は總て記載させ偏國偏藩に至るまで流布仕候様いたし候へは自然と人民誘導之一端とも相成可申候何卒此度兩國之大戦争等之事よりして我國人民之心得と相成候様之事は御記載被下幸便々々に御送り被下度奉願候我國歐洲諸國に比し候ては未余程之度が違ひ候故此邊之事得と御考味可成丈け人民に分り安き悟り易事を望み申候如御承知我國之人民未頑固之もの十に八九に御座候間此新聞局にても政府より開かせ候ては又政府之勝手とか何とか邪推而已いたし却る見

(鮫島は鮫島尙信)

(森金之允は森有禮)

(河瀬は河瀬眞孝)

るものも少く相成可申に付丸に不關政府之都合にして相開かせ度政府之事と雖も不條理にて可論事は少々爲論候位之方よろしき歟と相考へ申候是は只驅引に有之申候過日ニユーロクより之御一書相達已に外國之新聞紙に出居候事も御座候へとも未聞之新聞も有之直に備天覽にも申候彼御書狀中には心得と相成候事不少候此新聞局之主意兄の御合にて何卒鮫島へも御論し被下都合相成候へは不絶鮫島より弟之名當てにいたし我國人民之心得と相成候歐洲諸國之事申越吳候へは早速其新聞局へ相廻發行いたし候森金之允は米へ被差越候へとも名和緩從行いたし居候間此新聞局之主意御通し米洲の事にても我國人民之益に相成候事盡記載候る弟まで送り越吳候へは同新聞局へ廻し發行可致何卒此段御序に名和之方へ兄より御懸け合被下候へは別難有奉存候○河瀬は如何之都合に御座候哉定る此際之事に付歸國は見合歟と相察申候未英國滞在之都合に御座候は、可然御致意可被下候其外同國諸子を始め知己之面々へ



よろしく御傳言奉願候如此書狀に付猥りに我國之人と雖も御示しは御容  
赦奉願候其中時下別々御自玉第一に奉存候草々頓首

(大山は大  
山殿)

極月八日於西京認暫時歸國仕候薩大山氏へもよろしく御傳言奉願候

品川彌次郎様内密用

木戸準一郎

一二三 槇村正直宛書翰 明治三年十二月八日

今日御尋仕置べくと奉存不圖失念仕候此度瓦町御屋敷御かり上げ相成候  
に付るは藩邸へ之御達し如何之御都合に御坐候哉御書付御坐候は、何卒  
早々浪華まで御送り可被下候且又此往き御用にも相成り候へは御買上げ  
にも相成候哉凡御都合之處是又御洩らし可被下候尙又千萬御多務中恐入  
候得ども來春暫時出京可仕と愚考いたし居候處自然木屋町邊に暫に亦も  
坐敷借用相成候處御座候は、御聞合せ置奉頼候突然座敷等かり候亦も  
余程不廉に困り申候誠に私事まで數々相願御氣の毒に奉存候何も御容

赦是願候草々頓首

極月八日夜伏水に認

十八眞老兄御内拆

松 菊

(十八眞は  
槇村正直)

一二三 尖戸璣宛書翰 明治三年十二月上旬

於京都も兎角久留米秋田藩邸などへ浮浪ども入込候由に是までは其故  
一時相免れ候ものも有之由に相聞へ申候於東京も久留米秋田藩邸へ所詮  
入込候よし當春於西京長州之變動に應せし者を捕縛いたし候處多は於東  
京秋田藩邸に潜匿いたし居候ものよし何分にも御地之處御取締肝要奉  
存候廣澤之長屋に住居いたし候河村健藏と申候もの東京府へ出勤仕候間  
被招呼同人へも是等之邊得と被仰聞置候は、御取締之一助と奉存候片野  
十郎も御屋敷内に居候へは御聞せ置可被成候河村等は時々被招呼候亦東  
京府之事も被聞召候は、取締之邊一入氣脈相通じ候亦可然と奉存候

(廣澤は廣  
澤兵助)



○別符御面倒ながら御家來へ被仰聞早々留守へ相とゞき候様奉願上候拜  
(此書は宛名署名及び月日を開く明治三年十二月上旬木戸孝允が京都より尖戸磯に贈れるものなり)

一二四 大久保利通宛書翰

明治三年十二月十三日

大亂筆高恕

拜啓先以 御清適奉大賀候彌明曉は御乘艦之由今夕鳥渡參上仕候處御外出中に拜青不得仕残念に奉存候烈寒之折柄別々御自玉爲

(岩公は岩倉具視)

邦家專要此事と奉存候自然老公上御上京之御都合岩公御在留中に御内定も被爲在候御運合にも被爲至候は、乍御手数數御一書御洩らし奉願置申候此餘御氣付筋之義も御坐候は、何卒無御容赦御示教奉祈候先は爲其奉呈候草々頓首九拜

十二月十三日夜

(西郷は西郷隆盛)

尙々西郷先生始諸君へも可然御致意奉願上候弟等も明後朝は乘艦可仕

と奉存候且又過日來逐々申上候通何卒來夏頃までには萬里之遊歴是非是非御供申上度奉願候天下非常之變出來候得はたとへ一毫之御用に相立不申とも艱難之地に御奉公申上度奉存候得共今日之情勢に於徐々進歩之姿に御坐候得は五年十年之間決る今日は安堵と申日も有之間敷付るは一日も迅速を貴ひ申候此段御合置被下可然御高慮奉祈候拜

甲 東 盟 臺御内拆

允

(甲東は大久保利通)

一二五 三條實美宛書翰

明治三年十二月十四日

亂筆

御高恕奉仰候

謹啓先以

御清雅に被爲渡恐賀無限奉存候さては松代日田等之擾騒甚以苦々敷事に御座候得共益廟堂上確乎被爲在候得は却る進歩之機會と相成申候人民之



方向も彌相定可申候廟堂上におゐて一時之議論に御動搖被爲在候と始終人民之方向不相立而已ならず各々相迷ひ各其職業も勉勵不仕隨ふ今日之事至瓦解申候紛紜之際別る御大事と奉存上候日田等之事も下坂後早速申合せ夫々着手仕候處御沙汰之旨も有之取締向早速相運申候尙浮浪之近情其外上國之様子い曲井上聞多より御聽取奉願候且又彈正中之渡邊大忠段々承り及候事も有之永く當職に被差置候は臺中之處も却る不都合出來候と愚考仕候依願はくは只今之處に他職へ轉任被仰付候は可然と奉存候東京大坂兩府等も大參事御無人之事に付兩府之内へ御登用ども相成候は別る御都合之様奉存候將來之爲些懸念仕候儀有之決る政府之御爲當職へ被差置候は不可然と奉存上候に付此段内密入御聽申候爲其言上仕度奉捧呈候誠恐々々謹言

十二月十四日

乍恐此書面猥りに他人へ御示し被爲在候は不宜と奉存候間此段被思

(渡邊は渡邊昇)

食置候様奉願候敬白

御密覽

(此書は宛名及び署名を關く明治三年十二月十四日木戸孝九が大坂より三條實美に贈れるものなり)

一二六 井上馨宛書翰 明治三年十二月十五日

亂筆御推讀被下御火中奉願候

昨夜は御光來奉謝候弟も今日風之爲に又々上陸如御承知兎角風潮は敵と相成申候さては昨夜緩々拜聽仕候件も有之且弟之出京前逐々傳聞仕候處にも意外之世説不少必竟は昨夜申上候通大隈など始獨り他より度が相進み居候譯に何も尤至極に御座候へども又ものと申ものは三つの足が一つ高く相成過候も轉覆之患ひ有之候様之ものに付あれこれに乍老婆心度々人之しらぬ苦心仕候事不少此度も老兄御出に付候は何歟と目をつけ候ものも多く可有之且過日坂本等之行が有りも有之候事に付最初

(大隈は大隈重信)